うちは転生記

まじしゃんX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
うちは転生記

【Ｎコード】
Ｎ０７８６Ｓ

【作者名】
まじしゃんＸ

【あらすじ】
トラックに轢かれて死んだ慶介は気付けば二度目の生を受けていた。そこはＮＡＲＵＴＯの世界であり、うちはの直系の息子としての人生が始まった。原作を知らない一般人の慶介。二度目の人生の名はうちはサイゾウ。そんなこんなでうちはに転生してしまった一人の少年の物語が始まる。

序．終焉への序曲

忍者アカデミーでのカリキュラムは安穏とするだけでこなせるような簡単なものばかりだった。

家で行われる虐待に近い過密な訓練。親子の情など感じさせない――まるで一つの作品を生み出すための工程のようなそれは酷く厳しいものだった。

幾度身体が壊れたかわからない。そのたびに名門である【うちは】専属の医療班が駆け付け、即座に処置をしていく。継接ぎのような違和感を覚えつつも、それでも動く身体を酷使して修行に戻る。

今も広大な面積を誇る【うちは】の屋敷、その隅にある庭にできた空白――修練場で父テッシンと息子サイゾウは感情の混じらない能面のような表情で相対していた。

（……なんで俺がこんな目に遭わないといけないんだ）

壊れた人形のように軋む腕を強引に動かせながら、サイゾウは幼い身には似つかわしくない大人びた思考で現実の不条理さを罵った。

うちはサイゾウ。うちはの名を継いではいるが、正しくは分家である。齢十歳。実年齢はおおよそ二十六歳だろうか。

そもそもとして、サイゾウの元の名は慶介という全く違う名前であった。住む場所も違う。このような武家屋敷のような木造建築ではなく、もっと襤褸の古びたアパートだった。

この屋敷のように立派な塀に囲まれてはおらず、外と敷地を隔絶するのは錆びたフェンス。隣近所の人はみな顔馴染みであり、親兄弟などは既に死別してはいたが、それでも残った財産で何とか大学くらいまでは卒業できる蓄えはあった。これからの人生設計もきっちりと考えていて、あわよくば大学在学中に何かしらの国家資格を取ろうなどと考えていた。

そのためには受験勉強は不可欠だろう、と高校一年生ながらに予備校を探している道中、不慮の事故――トラックに轢かれたのだ。

慶介の記憶はそこで途絶え、気付けばこのような変な時代、変な家での第二の生を――サイゾウという名の人生を送ることになっていた。

「休むな、サイゾウ。そんなことでは宗家のイタチ様とサスケ様の役に立つことなどできんぞ！」

息も切れ切れの息子に対する言葉は辛辣なものだった。

胸中に怒りの焔が灯る。

瞬間、身体を蝕む痛みは消えた。

（――死にさらせ）

流麗な動きである。

腰元につけたホルスターから苦無を取り出すと、逆手で構える。

その動作は地面に踏み込むと同時に行われる。

その踏み込みは強く、深い。たったの一歩で彼我の距離を詰めると、テッシンの首を狙って跳躍した。

長年にわたって身体に染み込ませた格闘術。無意識でも動くのは身体を完全に支配しているからだろう。頭の毛先から足の爪先まで、全てが全て自分の意志のままに動く。一つの動きをするためにあらゆる部位の筋肉を行使する。そこには自然と無駄な動作が含まれるものだが、無駄を削ぎ落とし、精密な動作を連動させ、節々毎に力を倍加させていく。高水準の技術があるからこそ為せる業。まさに一撃必殺。

だが、閃光の如き斬撃はテッシンの指二本で簡単に受け止められることになった。

「それでも俺の息子か？　才能の欠片もないな。欠陥品め」

苦無を挟む人差指と中指。苦無を握る手とは逆の左手でテッシンの指を開けようと全力を尽くすが微動だにしない。サイゾウとテッシンでは身体の性能が違いすぎることを今更ながらに実感し、戦慄する。

しかし、これまでの修練を虚仮にするかのような罵倒。腕を？がれ、足を折られ、内臓を潰された不快感や激痛を【才能】や【欠陥品】の一言で一蹴されるのはサイゾウには我慢できない。

望んでやってきた苦行ではない。何度も逃げ出そうとしてはその度に捕まった。こんなわけのわからない第二の生を強いられている現状を嘆いたこともあるが、しかし、サイゾウも男だ。矜持がある。馬鹿にされ、ボロボロにされようとも、譲れないものがある。

サイゾウはテッシンをキッと睨みつけた。赤みがかった双眸は父の冷徹な瞳を見ても小揺るぎもしない。力一杯苦無を引き抜こうとしても、びくともしない。

ならば。

苦無からは手を放し、テッシンの胸を基盤に後ろに跳躍する。素早い動作で両手の形を変化させていく。これは印と呼ばれるものだ。忍者が忍術を行使するために必要なもの。

テッシンは驚きに目を見開く。その印は見覚えのあるもので、【うちは】の家に代々伝わるもの。しかし、下忍にすらなっていないものではまだ使えないはずのそれ。

「糞親父……！　念仏唱えて死に果てろ……！」

驚愕したまま金縛りに遭ったかのように動きをとらないテッシンを襲ったのはサイゾウの口から吐き出された等身大の業火。名は【火遁・豪火球】と言う。喰らえば骨すら残らない炎の激流。少なくとも、肉親に放ってもいいような生半可な攻撃ではない。

荒ぶる焔が周囲の木々をも巻き込んで炎の渦と化す。
天を衝くかの如き猛火は如何なく威力を発揮し、正しく全てを飲み込んだ。
煌煌とした赤い光に魅入られるように凝視するサイゾウは、次第に冷静さを取り戻していった。
激情に駆られて撃ち込んだのは密かに練習していたもの。別にテッシンを殺す為に習得したわけではない。単純に興味があったので文献を読み漁って手に入れた技術だ。
現代っ子であるサイゾウは当然のようにかめはめ波などを練習したこともある。若かりし頃は霊丸も練習した。結局はできなかったが、二度目の生を受けたここでは雷を落とす人がいたり、変身する人がいたり、炎を吐き出す人がいたりと如何にも少年魂をくすぐる事柄が溢れかえっているのである。当然ながら、そういうことに憧れを持つサイゾウはまずは炎だろと思ってこれを練習していたのだが――

「マジかよ。親父……死んじゃった？」

がくりと膝を落とす。
殺すつもりなどはなかった。今となっては言い訳に過ぎないかもしれないが、サイゾウは二人目の父親であるテッシンのことを殺すつもりなどなかったのだ。確かに悲惨な仕打ちをしてくる好感の持てない親ではあるが、少なくとも養ってくれているのは事実だ。
修行のとき以外は不器用ながらもこちらに気を使ってくることは知っていたし、それらのことがわかるくらいにはサイゾウも大人であった。激情家であるが故に感情に流されることもあるが、まさか死ぬとは思っていなかったのだ。
視界に映るのは燃え盛る業火。次第に涙が溢れてくる。

「勝手に殺すな。お前のようなひよっこに殺されてやるほど籠絡し

ておらん」

突如背後から張り手が飛んできて、サイゾウはバランスを崩して地面につんのめった。

振り返るとテッシンがいた。

「……」

「……」

長い沈黙。

テッシンは気まずそうに視線を逸らす。見ればところどころ服に焦げた跡がついている。サイゾウの炎を完璧に避けられたわけではないのだろう。

だが、そんなことはサイゾウにとってはどうでもいい。仔細どうでもよかった。

零れ出す涙を纏ったまま、一直線にテッシンのもとへと走っていく。

「……親父ィィィィ！」

抱きつくと同時に慟哭。

悲痛な叫びが屋敷内に轟くと、屋敷から一人の女性が現れた。母であるヒダマである。

「あら、この炎はサイゾウちゃんがやったの？」

泣き叫ぶ息子とあたふたとする旦那を放置して、真っ先に【火遁・豪火球】について言及するあたり何処かずれていると感じさせる女だ。

助けてくれ、と視線を寄越すテッシンのことを軽く放置して、「

今日はお赤飯ね」とぼやきながら屋敷の中へと入っていく。
取り残されたのはやや滑稽な状態になっている親子二人であった。

うちは転生記――終焉の悲劇編――
『変わる現実、変わらぬ事実』

作者：まじしゃんX

うちはイタチは天才である。鬼才と言ってもいいだろう。
僅か十歳にして中忍になる天稟は言うに及ばず、間もなく暗部へと駆け上がるという絶大な才能。
全てにおいて同族の中である【うちは】でも飛び抜けていて、何もかもが違うと思わせる圧倒的な格を有していた。
宗家の跡取りであるイタチ。忍者社会では宗家の言うことは絶対であり、なおかつ当代の宗主の発言となれば神の言葉に近い。
それは宗家の屋敷で行われたサスケの生誕祭のときのことだ。サスケと同い年であるサイゾウに興味があったのか、音もなく近づいてきたと思うと、唐突にサイゾウに話しかけた。

「君がサイゾウくんか？」

最も末席にしたサイゾウはよもや自分が話しかけられることもないだろうと高をくくって目の前にある御馳走を食べることに全神経

を集中していたせいか、少しだけの反応が遅れてしまった。
　掻きこんでいたのは蕎麦だったのでつるりと飲み干すと行儀よく正座をし直して、脇にある緑茶を嚥下した後にイタチの方へと振り向いた。

「……そうですけど、何か御用で？」

　怜悧な眼差しをした美貌の主。うちはの才を全て引継いだとされる鬼才――うちはイタチ。
　すらりとした身体は一見華奢なようにも見えるが、それは単に着痩せするからだろう。鍛え抜かれた身体に無駄な贅肉はなく、よくよく見ればあちこちに深く刻まれた修練の跡が見える。
　お互いに正座をして相対してはいるが、もし今サイゾウがイタチの首を狩ろうと襲っても、すぐに叩き伏せられるだろう。それほどに隙のない佇まい。いや、隙がなくなるように意識しているわけではないだろう。単純に心構えの違いだ。
　常在戦陣。
　いつでも戦えるようにすることは忍として当たり前のこと。次期宗主である。模範となる態度を示さなければならないのだからそれは当然のことだが、サイゾウは心から感心した。自分にはできないだろう心構えだからだ。
　真剣な視線を送るサイゾウと見つめ合うこと数秒、無表情だったイタチは笑みを零した。ふっと笑うだけの小さな仕草だが、サイゾウは見逃さなかった。

「いや、すまない。弟と同じ年齢の子がいるとテッシンから聞いてね。気になって見に来たんだ」
「父が私のことを？　あまり良い話ではなかったでしょう」

　サイゾウの想いに気がついたのか、イタチは足を崩して胡坐をか

くと、サイゾウにも胡坐をかくように勧めた。木目の床で正座は実はけっこう苦手なサイゾウは一度だけ断った後、もう一度勧められたときに足を崩した。これも礼儀の一つである。いくら宗主の許しが出たとは言え、目の前で胡坐をかくなどもっての外。しかし、二度の勧めを受けたならば、断ることも無礼。なればこそ、二度目で足を崩すことが礼儀とされるのである。作法の一つとも言えよう。

再びイタチは頬を綻ばせると、テッシンのいる上座の方を見た。完全に酔っぱらっているテッシンは周囲の分家たちと肩を組んでの乱痴気騒ぎをしている。我が親父ながら実に情けない、とサイゾウは哀愁の吐息を漏らした。その様が面白いのか、イタチは三度笑う。

「自分の息子が十歳にしてうちはの代表とも言える忍術を使えたのがよほど嬉しかったんだろう。先日、豪火球を受けて殺されかけたと酔いながら語っていた。とても嬉しそうに、ね。うちのサスケは豪火球を練習中でね。もしかしたら君とは良いライバルになれるのかもしれないと思って……」

「私はまだまだ若輩者です。父にも叱責されてばかりの弱者です。宗家のサスケ様と比べられるのはサスケ様に対して失礼かと……」

「随分とできた子だ」

褒められたとしてもサイゾウは内心複雑だった。

（二度目の生を含めると二十六歳。そりゃ周りよりはできた子供ではあるだろうけど……）

意味不明な世界に放り出され、訳のわからない忍者の集団に囲まれて、英才教育を受けてここまでやってきた。一度目の生の常識は簡単に崩れ去り、新たな常識を植え込まれる。何もかもが新鮮で、斬新なこの世界のことを決して嫌いではないが、どうにも自分の年齢に馴染むことができなかった。

悶々と思い悩むサイゾウを見下ろし、イタチは何を思ったのか…
…生誕祭の主役であるサスケを大声を張り上げて呼びつけた。
イタチによく似た顔をした少年がとてとてと近づいてくる。
サイゾウが知らないはずもない。宗家のサスケだ。
さすがに胡坐をかいたままでは失礼だろうとサイゾウは急いで立ち上がる。

「兄さん、何ですか？」
「お前には同世代の友達がいなかったろう？　ちょうど良い相手がいた」
「ちょうど良い相手……？」

訝しげに眉を潜めると、首を動かして周囲を見渡す。そして気付いたようにサイゾウを見下ろした。身長差が少しある。サイゾウは何故か悔しさが滲みだした。

「こいつですか？」

鼻で笑われたような気がした。「このチビですか？」とサイゾウの脳内では変換されている。
あまり同世代の友人に恵まれなかったのはサイゾウも同様だ。
忍者アカデミーでは突出した成績を誇るサイゾウは近づきがたい人種なのか、あまり人は寄ってこない。しかも教師受けが良く、見るからに優等生なのだが、アカデミーの行事はよく休む。何よりも実家での修練を重んじてきた結果なのだが、そのことによって人間関係に支障が出ていたのだ。
本人はあまり気にしていなかったが。
アカデミーでの男子の会話の八割は「あの子可愛い」「どの子が好き」などといったものばかりだからだ。サイゾウにロリータコンプレックスの毛はなく、あまりそっち方面の会話に興味がないせい

もあるだろう。
果たして、こういう面では二人は似たもの同士だった。
アカデミーでは孤立していて、成績はトップ。そして負けず嫌い。何よりも、お互いに苦痛な修行を厭わない性格をしていた。

「失礼だぞ、サスケ。初対面の相手にこいつとは何だ？」
「……ですが、分家です」
「家に囚われているようでは小さな枠から抜け出せない。お前は小さな籠の中で満足するような男になりたいのか？」

ただ環境が違うだけ。立場が違うだけだ。
サイゾウはあくまで分家の嫡男であり、サスケは宗家だ。権力があるのは相手である。そして子供である。
大人気ないことをする気のないサイゾウは一呼吸置くと、にこりと営業スマイルを浮かべる。鏡の前で常日頃練習している愛想笑いだ。なかなか堂に入っている。

「はじめまして、うちはサイゾウです。サスケ様と同じく十歳です。違う忍者アカデミーに通っているので私のことは御存知ないかもしれませんね」

そう言って手を差し出すと、サスケもおずおずと手を出してきて、握った。
握手である。

「……はじめまして、うちはサスケです」

これが二人の初めての出会いだった。
ぎゅっと握った掌はどちらもごつごつとしており、厳しい修練を課せられていることがわかる。子供のような柔肌などではない。鍛

え抜かれた忍者の手だ。
サスケがじろりとサイゾウを見て、サイゾウは視線を受け流す。
「この子は【火遁・豪火球】が使えるようだ。サスケにはまだ使えないんじゃないか？」
「使えるよ！　いっぱい練習したもん！」
イタチの言葉にサスケが反発した。
そして、再びまじまじとサイゾウのことを見た。
同世代で自分と同じ程度の力量を持つものなど見たことがない。
イタチは自分と同じ年齢のときには中忍になっていたりしたが、あれは特別だ。比べるのもおこがましい絶対者。憧れの存在。地について見るようなものではないのだ。
視線の色が変わった。下のものを見る目から、同格のものを見る目に。
（……認められたのか？）
サスケの感情の変化に気付いたサイゾウはぴくりと眉を動かすだけで留めた。
「そうか。お前のせっかくの晴れ舞台だ。見てやろう」
「うんっ！」
そうして二人は祭りの場を離れると修行場へと向かって行った。
サイゾウは取り残され、二人の後ろ姿を見送った。付いていくか迷ったか、兄弟水入らずを邪魔するわけにもいかないだろう。そして、目の前にある御馳走を逃すほどサイゾウは愚かではない。
席に戻って蕎麦を啜り、豪華な食材――鯛の焼いたものや各種魚の刺身など――をどんどんと食べていたときのこと。背中を思い切

り叩かれて咽た。
非難を込めた視線を後方に向けると、そこにいたのはサイゾウの父であるテッシンがいた。鼻っ柱を真っ赤にさせて、吐き出す息は酒臭い。ぶはぁ、と如何にも酔っ払いっぽい吐息を顔にぶつけられ、サイゾウは眉を潜めた。

「何を話してたんだぁ？」
「親父、酔いすぎだ。べらべらと要らんことを喋ったせいでイタチ様に目をつけられた」

勘弁してくれよ、とサイゾウは低い天井を仰ぐ。肩も竦め、これ以上ないくらいに厄介だ、と言う仕草をするが、テッシンは大口を開けて笑う。

「当然だろ。お前は俺に似て優秀な――いや、俺を越えて優秀な忍になれる逸材だ！　将来はうちはを背負うことになるだろう。そんな大きくなる男がちまちましてたらいかんだろ！」

十年間テッシンの息子をやっているが、ここまで盛大に褒められたのは初めてだ。
テッシンは寡黙であり、口下手である。あまり好んで喋らないこともあるが、子供との距離感をいまいち掴めない不器用さのせいもあるだろう。
今は酒の力を借りてこんなことを言っているが――だからこそ、これが本心なのだとわかる。
だが、認められない。
褒められることは嫌いではないが、どうにも真に受けるのは恥ずかしい。

「散々欠陥品やら才能がないだのと毎日言ってくれたのは誰だよ」

サイゾウはソッポを向いてこんなことを言ってみるが、返ってくるのは慈愛の籠った男臭い笑み。

「本当に才能がない奴にはそんな罵りの言葉をかけるわけないだろう。無能に英才教育を施すほど俺は残酷じゃない」

いつになく饒舌な父の言葉に耳まで真っ赤にし、サイゾウは完全に顔を背けた。

「……本当に酔ってるな。涼んできたら？」

「あー、だな。ちょっと厠行ってくるわ」

サイゾウは【うちは】のことが嫌いではなかった。

父のことも、母のことも、素直に甘えられるほどに器用ではないが、嫌いではなかった……。

序．終焉への序曲（後書き）

オリジナル展開とオリジナル設定がいろいろと加わります。あと、原作キャラもけっこう使う予定ですが、ナルトなどとの絡みはあまりないかもしれません。

弐．終焉の時、来たれり

生誕祭を終えて何カ月か経った頃のこと。
サスケは何度目かわからないくらいに取ってきた忍者アカデミーでの一位という成績が記された通知簿を手に持って、空いた手には傘を持ち、いそいそと自宅へと駆けていた。
雨の降る日だった。
時折雷鳴が轟き、土砂降りの雨のせいで柔らかくなった地面に足がとられそうになるが、持ち前のバランス感覚と運動神経でこけることなく自宅へと辿り着く。
いつもは閉じられている観音開きの門は開かれていた。
不審に思いながらも屋敷の門を潜り、家へと近づいていく。
つんとした錆びた臭いが鼻に障る。
この臭いの源は何だ？
嗅ぎ慣れたとは言い難い臭い。それは家に近づくにつれて濃くなっていく。嘔吐を催す刺激臭がだんだんと濃厚になってきて、胃の中に詰め込まれたものが逆流しそうになる。
高鳴る心臓。ばくばくとうるさいほどに鳴り響くそれはサスケの不安を煽り立てる。
おそるおそる歩を進めると、屋敷の庭先には慣れ親しんだ人がいた。

「兄、さん――？」
「サスケか」

イタチにしては珍しく呆けていたようだ。サスケの進入にも気付かず、雨に打たれたまま庭先でぼんやりと空を眺めていた。
びしょびしょに濡れた衣服はうちはの代紋が刻まれているもの。
額には木の葉隠れの額当てがつけられていて、いつにも増して嘆息

が多い。

「疲れてるみたい。どうかしたの？」

そう言って近づくと、サスケはイタチも傘に入れた。背伸びしなければいけない身長差がなんとも辛いが、大好きな兄と過ごせるのならこのくらい何ということもない。

ふっとイタチは笑い、鴉の濡れ羽のようにひたひたになった髪を濡れた衣服で拭うと、サスケの頬に手で触れた。べとりとした温い何かが付着する。

「なに、くだらん余興に付き合わされてな」

いつもの笑み。そう、いつも自分に向けてくる優しい笑みからは、不思議と温かみというものがなかった。

べとりとした頬を手で触れてみると、赤い何かが付着している。

（――これは、何だ？）

足から力が抜けていく感覚。急に世界が色褪せて見え、イタチの顔がのっぺら坊のように表情が消えた。

気付けば傘は地面を転がり、通知簿は雨に濡れてぐちゃぐちゃになっていた。

のろのろとした足取りでサスケは屋敷に向かう。イタチの衣服が濡れている原因が雨だけではないことに気づいていながらも、必死に目を逸らして。

イタチはサスケを追うこともなく、庭に佇んでいた。

そして。

靴を履いていることも忘れ、サスケはそのまま屋敷へと上がった。

中には使用人たちや親戚、父と母がいた。

壁にもたれかけているもの。地面に這いつくばっているもの。仰向けになっているもの。さまざまいるが、共通していることはただ一つ。

赤黒い液体が身体から漏れ出していることだ。

「父、さん……？　母さんも……？　あれ、変だな……赤くなってる……」

混乱する。

昨日までは普通に接していた知り合いや両親が、もう動かないという現実は容赦なくサスケから気力を奪い取る。

萎えたかのように屋敷の座敷の中央でへたれこんだサスケは、後ろからやってくるイタチに気付いていても振り返ることすらしない。

「サスケ、アカデミーで何を学んでいる」

イタチは倒れている父の近くで片膝を曲げて座ると、首元に触れた。どくどくと流れ出ている血痕を拭うと、サスケに傷を見せつけた。

「これは刃物による斬殺だ。見ろ、首の動脈を掻き切られているだろう？　苦しむ間もなく逝っただろう」

サスケには意味がわからなかった。

何でそんなことを言うのか。なんでそんなことが言えるのか。唯一の家族が死に、血族が息絶えた。とてつもない大事件の渦中にいるのに、何故ここまで冷静でいられるのか。

「なんでそんなに冷静なのさ！　父さんと母さんが死んだんだよ！？」

激昂した。
嫌な予感が脳裏を駆け巡るが、その予感を否定してもらいたくて、叫んだ。
するとイタチは自嘲するかのように口を歪めたのだ。
「冷静？　俺が？　見ろ。手は震えているし、声は擦れている。決して平然としているわけではない」
立ち上がり、震えた両手を握りしめ、錆び付いた臭いを振り払うかのように頭を振る。
しかし。
「じゃあなんで！　なんで笑ってるんだ！」
自嘲の笑みは哄笑に変わったいた。
くつくつと。くつくつと口を歪めて笑っていた。
潜めた声が喉を鳴らす。
ぴたりと笑い声は止んだ。
雷鳴が轟く。
暗闇となっていた屋敷に閃光が走り、おぼろげにしか見えなかった目も背けたくなるような惨状が照らしだされる。
ひぅ、と悲鳴が漏れた。
「俺が殺したから……」
ぽつりと呟かれた言葉は雨の音色に溶けていった。
耳に届くのは地を打ち付ける雨粒が生み出すもの。イタチの放った言葉を掻き消してくれるはずだったが、よく通るイタチの声は無意識に脳髄に染み渡る。

「兄さんが……？」

理解できない。

何のために殺すのか。昨日までは家族仲良くしていたはずではないか。いや、仲が良いとは言い難いが、殺意を抱くほどの悲しい関係ではなかったはずだ。あまりにも――いきなりすぎる。

「嘘だっ！　兄さんがそんなことを……！」

「本当だ」

断定の言葉が無慈悲に響く。

サスケは揺れる瞳でイタチを見るが冗談を言っている顔ではなかった。

いつも通りの無表情。冷たい双眸。

まるで全てを睥睨しているのかのような視線がたまらなく気に食わなかった。

「なんで……なんで……なんでっ！」

イタチの着る衣服の襟元を掴み上げようとするが、わき腹を蹴り飛ばされる。

サスケの小さな身体は吹っ飛び、障子を突き破って転がり続ける。

落ちたのは庭。どろどろの地面に這い蹲り、力なく項垂れる。

くそっ、悪態の言葉が小さく毀れる。

「己の器をはかるために殺した」

淀みない足取りでイタチはサスケとの距離を詰める。

咳きこむサスケは激痛に悶え、身動きすらままならない。泥のつ

いた顔は苦痛に歪み、目は何も写さない。

「憎いか？　俺が憎いか？」

庭で転がるサスケの頭を掴み上げると、イタチは無理やり視線を合わした。

サスケは怯えているのか、決して視線を合わせようとしないが、両手で顔面を固定され、見させられた。

三つの車輪が刻まれた眼――写輪眼。

自分がまだ使えない【うちは】に伝わる血継限界。

震えた。

「――信じるもんか。兄さんが殺しただなんて……絶対に信じるもんかっ！」

「期待外れだな。心底失望した……」

「ふざ、けんな……！　ふざけんなよぉ！！」

気炎の混じるサスケの雄叫びは、しかし何も伝わらないのか。

弱者の言葉に意味はない。そう言わんばかりのイタチの態度は冷酷そのものだった。

「お前はそこで這い蹲っていろ」

サスケを地面に顔面から叩きつける。

そうしてサスケの意識は途絶えた。

伝達係のものが悲壮感を漂わせながら語った言葉を聞き、テッシンは耳を疑った。
次期宗主であるイタチによる【うちは】一族に対する敵対行為。
理由もわからずに唐突に襲われた一族のものは抵抗することすら叶わずに死を迎えた。
テッシンの屋敷は宗家の屋敷からほど近くにある。伝達係の言によればすぐさまこちらにイタチが来るだろう。

（逃げる？　いや……）

暗部に所属するということは並大抵の実力では無理なことである。そして、表沙汰にできないような仕事に従事できるだけの精神的適性が必要だ。つまり、目標に対する追跡能力、探索能力などの隠密の能力が問われるものが多い。
その仲でもエリートとされるイタチである。息子であるサイゾウを連れての逃避行が成功するとは思えなかった。
座敷で唇を噛み締めて何かに耐えるように拳を握るサイゾウ。生誕祭からサスケとの交流が深まり、テッシンが知る限り、たまに一緒に修行をしているようだ。きっと心配しているのだろう。そして、理不尽な虐殺を行うイタチに怒りを覚え、満身創痍の伝達係のものに同情しているのか。サイゾウの隣に座るヒダマはサイゾウの肩に

手を置いている。ぎゅっと掴んでいた。
ふむ、とテッシンは考え込む。結論は簡単に出た。
「逃げろ、サイゾウ。次期宗主は御乱心だ」
「逃げるなら一緒に逃げよう」
サイゾウはテッシンの服の裾を掴んでそう言う。だが、テッシンは苦笑してサイゾウの手を優しく払った。
逃げたい気持ちはあるが、過酷な現状がそんなことを許さない。甘ったれた幻想にしがみつけるほどテッシンは楽観主義者ではなかった。
サイゾウと視線を合わせるために膝をつき、両肩に手を置き、強く掴んだ。
厳しい修練を課した自慢の息子。何度も逃げ出したが、そのたびに捕まえて、強制的に修行をさせた。何故なら、サイゾウには才能があったから。厳しい修行に耐えるだけの恵まれた身体。アカデミーでもトップをとる頭脳、宗家や分家の難しい立場を理解するだけの見識、全てにおいてテッシンの期待を上回る成果を上げている。
だから、理解してくれるだろうともテッシンは考えた。
「――イタチ様は強い。俺たちが一緒に逃げても、きっと追いついてくるだろう」
「なんでそんなことがわかるんだよ……」
「俺とヒダマだけなら逃げられる。けど、俺たちには愛すべき足枷がある」
「……俺のせいか？」
そうだ、とテッシンは深く頷いた。
「お前の小さな両肩に希望を繋ぐために、俺は死ぬ」

「それでいいのかよ。生きることを諦めて……」
「言っただろ？　お前は俺の希望だ。だから、生きろ」

サイゾウが大きく息を吸って吐き出そうとしたとき、テッシンはサイゾウの首に手刀を下ろした。
意識が刈り取られたサイゾウは壊れた人形のように倒れるが、テッシンの腕に受け止められる。

「……許せ」

一言だけ言い残すと、テッシンはサイゾウをヒダマに渡した。

「ヒダマ――後は頼む」
「御武運を……」

ヒダマはサイゾウを肩に担ぎ、一目散に駆け出した。
伝達係のものはもう事切れていて、身動きすることもない。
この場に残ったのはテッシンと……そして、新たに現れた虐殺者。

「サイゾウは……？」

声の主であるイタチは音もなくテッシンの背後に出現した。
薄い気配。聞こえない足音。テッシンはこの時点でイタチに勝つことは無理だということを悟った。

（仲間なら心強いのだろうがな……）

振り向くと、血と雨で濡れた衣服を纏うイタチがいた。
手には苦無を持ち、テッシンよりも低い身長であるにも関わらず、とても大きく見えた。

怜悧な双眸。全てに等しく無価値の烙印を押しているかのような揺れることなき瞳。情の篭らないそれは容易く希望を奪い去る。

「逃がした。心中するほど俺は出来ていないもんで……」

「そうか」

言葉とともにテッシンの腹に異物が侵入してくる。

痛いとかではなく、するりと縫いこまれるような感覚。

焼け付くような腹部を見てみると、そこにはイタチが投擲した苦無が入り込んでいた。

損傷箇所は肝臓。致命傷である。

喀血とともに力が抜けていく。時間が経てば死ぬのだろう。

興味を失ったのか、イタチはテッシンを視界に入れるのを止め、ヒダマたちが行った方を向いた。

こっちか、と小さく口が動いたのをテッシンは見逃さない。

気力を振り絞り、イタチの身体にしがみついた。

「行かせはせん……行かせは……っ！」

不思議なことにしがみついたものは触れたと同時に掻き消えた。

テッシンは気づく。

掴んだものは実体のある分身――影分身なのだと。

勢いそのままに転がり、テッシンは地面に這い蹲った。起きる体力はもうない。

無様を晒すものに何を思ったのか、イタチはゆるやかに歩み寄ると、テッシンの頭を踏みつけた。

「身を呈して守るか。それはサイゾウが優秀だからか？」

心からの疑問なのか。イタチは問うた。そして、それをテッシン

は鼻で笑う。

「……血を分けた愛息子だからだ！　任務で力足らずに死ぬのもいい。誰かの為に命を賭して死ぬのもいい。だが、心血注いで育てた俺の息子が、意味もなく殺されることだけは我慢ならん！」

「うちはの血に拘る有象無象ども」

「自分の血族を重視して何が悪い！」

踏みつけてくる足に力が篭る。頭蓋が悲鳴を上げる音が耳鳴りのように響いた。

「だからお前たちは小さな枠から抜け出せない。そうして自分の器を決めつける。だから俺は……その枠を取り払うんだ」

「一番拘ってるのは自分自身じゃないのか？　何もかも消さないと抜け出せないなど、意志薄弱に過ぎる。背負った責任を蔑ろにして、全てを放り出して、何が器だ！　自分の掌から零れ出したのは全部お前が小さいからだっ！」

万力で絞めつけられるような痛みが一瞬だけ和らいだ。

耳に入るのは雨の音。身体から漏れ出すのは血の雫。

いや、よくよく耳を澄ませば、硬質な何かが擦れる音が聞こえてきた。

歯を軋ませる深いな音色。イタチの口中からだった。

「黙れっ……黙れっ……黙れっ！」

頭が潰れる。そろそろ殺されるのだろう。テッシンは自分の人生の終着点を見た。

死ぬ間際に見るという走馬灯。脳裏に駆け巡ったのはこれまでの人生ではなく、愛すべき息子と妻との安らぐひと時だった。

そして、憎悪に塗れたイタチの姿。
最後の力を振り絞り、イタチの足を持ち上げる。驚愕に打ち震えるイタチを睨みつけ、テッシンは叫んだ。

「我が息子が必ずお前の人生に終止符を討つ。うちはの代紋を背負える器をあいつは兼ね備えている！！」

言うべきことを言った満足感からか、テッシンは力尽き果て、地に伏す。
既に事切れていたテッシンの首元をイタチは苦無で掻き切った。

どこからか声が聞こえた気がする。
心地よい浮遊感。魔を差すかのような喪失感。
何か起こってはいけないことを感じた。予感と言うべきか、悪寒と言うべきか。サイゾウはそれらに襲われて目を覚ました。

「起きた？」
「母さん……？」

浮遊感の原因は母であるヒダマに抱かれて移動されていたからだろう。既に【うちは】の敷地は遠く、公共の修行場として使われる森の中だった。
鬱蒼と茂る木々は雨露を凌いでくれるし、生物の多い森ならば隠れるのに最適だ。気配を打ち消してくれるから。
しかし、逃げたのはいいとしても……肉親がいなかった。

（……親父は？）

父親の姿が一切確認できなかった。
木の幹にもたれかかるサイゾウのことを申し訳なさそうに見つめるヒダマしかいなかった。
温かい手が頭に置かれる。

「ごめんね。母さんは行かなきゃいけないから、ここでゆるりと待っててね」
「行くってどこへ？」

もう十分に逃げた。それともテッシンを迎えに行くと言うのか。
だが。

「サスケ様を迎えに行かなきゃ」
「危ないよ！　そんなの、絶対に許さないから……」

ヒダマの言葉を認めるわけにはいかなかった。
おそらくもう生きてはいない。一族を虐殺する理由などサイゾウには皆目検討がつかない。それでも、虐殺をするのならば宗家のものの命を残すはずがない。本流の血が途絶えなければ家は再興できるからだ。

「あなたは次期宗主サスケ様の手足となるのよ。宗主が生きてなきゃ話にならないでしょ？」

サイゾウに言い聞かせるように、頭を撫でながら紡がれる言葉は――とても残酷なものだった。
何よりも家を重んじる。
それがサイゾウにはとても嫌だった。
引きとめようと腕を伸ばすが、サイゾウの身体は動かない。もどかしそうに何度も力を込めるが、身動き一つとれない。

よくよく見ればヒダマの瞳が変化していた。【うちは】のもののみが使える写輪眼。
その特性はサイゾウもよく知っている。何度も両親から教えられたから。

「あなたはまだ開眼してなかったわね。これも写輪眼の力の一つ。金縛りのようなものよ」

知っている。だからこそ抗えないことも理解できている。
だが、頭は理解できても感情は納得できない。
ぎしぎしと軋みをあげる身体に意思を反映させようと力を込める。
無駄なのに。

「俺も付いていく！　付いていくから……っ！」
「母さんを困らせないで、ね？　サイゾウは賢い子。理解してるわよね？」

頬にキスをされ、額に指で突付かれた。

「愛してるわ。健やかに生きて……」

ヒダマはそう言残して雷鳴の轟く森を疾駆する。
残されたのはサイゾウただ一人。

「うあああああああああああああああ！」

泣き声は雨音に打ち消された。

終、新たな宗主、始まりの唄

呆然と見上げる空はまるで泣いているように見えた。
どれほどの時間が過ぎたのか。
薄暗かった景色は漆黒に染まり、夜が落ちた。
サイゾウの身体を縛り上げていた写輪眼の力は消え、やっと動くようになった。明らかに手遅れになってから、動くようになった。

「……行かなきゃ」

身を隠していた木陰から出てサイゾウは我が家へと向かおうとするが、ヒダマの向かった先はおそらく【うちは】の本邸だろうと思い直してそちらに歩き出す。
気力の萎えている状態でも日ごろから鍛えている身体は自分の意思に従ってくれる。

『知識も大事だ。状況を的確に把握できる能力を養えるからな。忍術も大事だ。状況ごとに取り得る選択肢が増えるからな。しかし、最も大事なのは体力だ。体力が少ないものはすぐに体調を崩し、精神をやられる。何事にも求められるのは最後まで立っていられる頑丈な肉体なんだ』

テッシンが口を酸っぱくして言っていたことはある意味では正しいのかもしれないとサイゾウは思う。心とは裏腹に身体は力強い足取りで歩いているからだ。それがたまらなく悔しかった。
自分にはまだ体力がある。つまり、戦えたという事実が残っている。
冷静に考えれば良くて即死、悪ければ人質にとられて足手まとい。どちらにしても邪魔にしかならないほど弱いという自覚はあったが、

それはそれ。これはこれだ。感情というものは時に不条理なことを思考させる。

次第に頭が熱くなってくる。怒りにやられて融けそうだ。

熱に浮かされたかのように自然と走り出す。【うちは】の本邸へ走り出す。

全速力だ。息が切れるのも構わない。正しい疾走法を習ったが、そんなものは無視だ。力の伝達を阻害する無駄な動きがふんだんに含まれた全力疾走。

本邸へ着いたときは息も切れ切れになっていた。

霞む視界。嫌な臭いに包まれたそこ。

「これは……？」

本邸の庭には信じがたい光景が広がっていた。

うちは転生記――終焉の悲劇編――

『変わる現実、変わらぬ事実』

作者：まじしゃんX

いつもは綺麗に整えられた庭。そこは盗賊に掘り起こされたばかりと勘違いしてしまいそうなほどに荒れ果てていた。

いくつもの盛り上がりがある。何かが埋められたのだろうことは察しがつく。

土で埋められた盛り上がり、おそらくは下に遺体がある。

忍刀を突き刺し、墓標の代わりにしていた。

ぼろぼろの手。庭を掘り起こして、自分より大きい大人たちを埋めるために無理をしたのだろう。サスケの手の皮は残っている部分のほうが少なく、血まみれになっていた。

サイゾウからではサスケの後ろ姿しか見えないが、下を向いて力なく項垂れている姿は泣いているように見えた。

「……サイゾウか」

そう言って振り向いたサスケ――はつらつとした表情がよく似合うはずなのに、今となっては屍によく似ている。感情というものが完全に抜け落ちた死体のようだった。

門を潜って脇に逸れて歩いたところにある庭からは座敷の中がよく見える。どす黒く染め上げられた畳や梁はとてもではないが直視できるものではない。たまらない臭気にサイゾウは嘔吐しそうになる。父母の遺言であるサスケが無事なのだから、その前で醜態を晒すわけにはいかない。何より、サスケはサイゾウから見れば年下の子供だ。弱いところを見せるには抵抗があった。

「サスケ様、ご無事で……！」

駆けつけ、抱きしめる。

瞬間、サスケの身体から力が抜け、崩れ落ちそうになった。

「――僕は何もできなかった。戦うことも、守ることも、立ち上がることすら……」

罪人が懺悔するときの震えた声音。
サスケはきっと思い返しているのだろう。
無力な自分。何もできない自分。そして、裏切った兄を。

「だからせめて……弔おうと思った。それだけなんだ」

抱きしめているサイゾウのことを強く押して離れると、サスケは無為に歩き出した。
目的があるわけでもなく、墓標を見下ろしている。
サイゾウもサスケの後をついていった。

「母は――ヒダマを知りませんか？」
「死んだ。目の前で……」
「そうですか……」

サスケは立ち止まり、ぎゅっと拳を握りしめる。皮のなくなった掌からは痛々しい鮮血が流れ出す。
自虐的な行為を止めようとサイゾウはサスケの手を掴もうとする。しかし、サスケはサイゾウのことをキッと睨んで手を振り解いた。

「あいつは僕に押し付けたんだ！！　一族復興の願いを！　兄さんへの……イタチへの憎悪を！！」

悪態だ。

「あなたは宗家の血族でしょう？　泣いている暇はないはずです。こんなところで座り込んでいる余裕もないはずです。今すぐ立ち上がりなさい。立って逃げなさい。生き延びなさい。無様でもいいから、時機を待ち……一族復興を！　こんなことを言って目の前で死んだんだ！！」

サスケを助けようとヒダマは本邸に来て、サスケを庇って死んだ。
何故かサスケはイタチに殺されることはなく、こうして生きている。
そんなふうに理由もわからずに生き残ったサスケにとって死者の言葉はつらかった。
激昂はすぐに収まり、鎮火する。
ゆらめく焔はとても小さかった。

「僕には何も残っていない。血塗れの家。死骸の埋まった庭。怨念がこびりついたものしか残されていない」
「私がいます。サイゾウはサスケ様の仲間であり、手駒です」
サイゾウが再び差し出した手を、今度こそサスケは払いのけた。
「お前に何ができるって言うんだ！　何も残ってないくせに！　お前だって僕と同じじゃないか！！」
「はは、そうですね。さっきまで泣き喚いて、震えながら森の中にいましたよ。今も実は足に力が入らなくて、立つだけでしんどいです」
ちゃらけた笑みを浮かべたサイゾウだが、次の瞬間には引き締まった凛々しい眼差しになる。サスケは怯んで後ずさるが、漆黒の双眸はサスケを捉えて離さない。
「今はこんな情けない私ですが、いつかサスケ様の役に立ってみせます」
そんな言葉を聞き、サスケの表情は複雑に変化した。
喜び、悲しみ、困惑、怒り――。最も色濃いものは怒りだった。

「呆れろよ！　蔑めよ！　もっと僕につらく当たれよ！　僕は何もできなかった情けない男なんだ！！　そんな僕に期待するな！　尽くそうとするな！　重いんだよぉ……！」

サスケの自分に対する絶大な怒り。

何もできないという事実。何もできなかったという事実。残された一族からの期待。全てが全てサスケの両肩に伸し掛かる。

幼い身のサスケにとって……重責に過ぎた。

サイゾウはふっと笑い、見覚えのある忍刀が刺さっている墓標へと近づいていく。

「これは母ですか。これは父ですね。名を刻まれた小さな墓標。ありがとうございます」

座り込み、黙祷を捧げる。

死者への鎮魂は死ぬ前の世界と生まれ変わった世界、どちらにおいても変わらない。

瞑目し、手を合わせる。そして過去に想いを馳せるのだ。

冷ややかな湖面を映し出したかのような静謐。

怒りに染まったサスケには冷静なサイゾウの態度がたまらなく不快だった。

黙祷が終わったのか。サイゾウは立ち上がるとサスケのことを真摯に見つめ、逃げることを許さない。

口を開いた。

「一族復興。イタチへの復讐――やるべきことはたくさんあるでしょう。やりたいことではないのかもしれません。しかし、どうか一族の悲願として受け止めてもらえませんか」

瞬間、サイゾウの視界が赤く染まる。

気づけば激昂に駆られたサスケに頬を思い切り殴り飛ばされていたのだ。
暗転する視界。吹き飛んだ身体は地面を転がり、殴られた頬はじんじんと痛む。
這い蹲って見上げると、握りしめた自分自身の拳を信じられないといったふうに凝視しているサスケの姿が見えた。

「……ぐっ」

苦痛を堪えて立ち上がる。
混乱しているサスケを少しでも宥めようとサイゾウは近づいていくが、

「重いって言ってんだろ！　僕はそんなことやりたくないし、考えたくないんだ。放っといてくれよ！　無理なことを口に出すなよ！」

サスケがキレた。
我慢を重ねていた。信じていた兄に裏切られ、両親や親戚を皆殺しにされた。
まだ十歳の子供が、である。
普通に考えればいくら優しくしてもし足りない。解決してくれるのは緩やかに流れる時間だけだったのだが、その時間すらも与えられない。
なぜなら、サイゾウも家族を失って焦っていたから。残された言葉を順守しようとしたからこそ、サスケの心情を察することができなかった。

「一族復興？　どうやってやるんだよ！　サイゾウは男だし、僕も男だ。子孫を残すにも血が薄まる！　そんな状況で元通りにするなんて土台無理な話なんだよぉ……！」

「方法なんていくらでもあるでしょう！　うちはの源流である日向の女でもいいではないですか！　それならば血は薄まらない！！」
「こんな状況でどうやって復興させるんだよ！　僕はまだ下忍にすらなれてない！　戦えない！　弱いんだ！！」
「じゃあ強くなればいいではないですか！　苦痛を飲み込んで、ひたすらに肉体を苛め抜いて！　優秀な忍びになればいいではないですか！！」

お互いの主張は交わらない。
そっとしておいてほしいサスケと復讐がしたくて仕方がないサイゾウ。
ムキになって睨み合っていたが、先に目を逸らしたのはサスケだった。

「いくら強くなっても……兄さんには勝てないよ」

諦めの吐息は庭内によく響いた。
一族の死骸の中心で、サスケは泣き声を漏らしながらそう呟いた。

「何故無理だと思うんですか」

サイゾウの言葉で火がついたのか、サスケは再びサイゾウのことを睨みつける。

「兄さんは僕と同じ年齢で中忍になっていたんだ。僕はアカデミー卒業すらなれていない落ちこぼれ……比べるまでもないじゃないか！」

サスケなどは飛び級することもなく普通に進級している——落ちこぼれとは言い難いが、飛びぬけて優秀というわけでもない。平凡

なものの中では優秀といった程度の能力だ。
しかし、イタチは違う。
一族始まって以来の天才児。写輪眼は既に開眼していて、すでに暗部の仕事をこなしている。稀に見る才能。
まさに選ばれたものだ。
それに比べてサスケ自身は――まるで全ての才能を兄に奪われた出がらしのようだ。

「早熟な人間もいれば晩成な人間もいます。サスケ様は大器晩成型なんですよ」
「なんでわかるんだよ、そんなこと！」
「なんで勝てないと決めつけるんですか！　未来のことなんて誰にもわからない！！」
「うるさい……！」

怒声とともに放たれた拳は空を切った。

「避けんなよぉ！」

怒りに任せて避け続けるサイゾウに拳を振るうが、触れることは叶わない。冷静に距離をとり、サイゾウは安全な場所へと逃げ続ける。
いつまでも攻撃を続けるサスケに対して怒りが募っていくが、反撃をするわけにもいかない。ただただ避けているのだが、だんだんと我慢の限界が来た。
サイゾウも、心に傷を負っていた。
大振りの拳を懐に潜り込んで回避し、その動作と同時にサスケの足を引っ掛けて、転ばせた。
受け身を取ることすらできなかったサスケは頭から地面に落ちると苦痛の吐息を漏らし、怒りで朱に染まった双眸でサイゾウを睨み

つけようとする。しかし、頭のすぐ隣に勢いよく落とされた踵を見て息を飲んだ。

「……私の家族はサスケ様の兄に殺されました。正直、憎い。面影を残すあなたが憎い」

本気の憎悪をぶつけられたことはサスケにはない。
殺意すら混じるそれは純然たる悪意。どす黒い感情。
蛇に睨まれた蛙のようだった。

「なんで私の両親は死んだのに、あなたのような情けない男が生き延びているんですか？　反吐が出る」

サスケの頭を引っ掴み、片手で持ち上げる。
髪が抜ける激痛でサスケは顔を顰めるが、そんなものはお構いなしだ。

「敬語を使うのも、機嫌を窺うのも飽きた。そこで一生泣いていろ」

墓標の上に放り捨てられ、サスケは呆けたようにサイゾウを見る。

「一族復興は俺がやる。イタチも俺が殺してやる。あんたは神輿程度に飾ってやるよ」

サスケのことを見るサイゾウの目は、淀んでいた。ゴミを見る目だった。

「腰抜け」

蔑みの言葉。

サスケがサイゾウに求めたものだった。
しかし。

「違う！　僕は腰抜けなんかじゃない……！」

サスケは勢いよく立ち上がり、叫んだ。
馬鹿にされたという事実が胸中に渦巻く。何をやっているのか、と自分自身を罵る言葉が聞こえる。
そんなサスケの心情を理解しているかのように、サイゾウはサスケのことを鼻で笑った。

「俺を殴ることはできるのに、イタチを殴ることはできない。典型的な臆病者。あまつさえ死者の遺言すら守れない屑と来た。救いようがない」
「黙れ……」
「そうさ。あんたは逃げてるんだ。頑張ることも、現実に立ち向かうことも……そんなやつに期待するなんて無駄だった」

ふんと鼻息を鳴らす。
大仰に肩を竦めて、これ以上なくサスケのことを馬鹿にする。

「あんたにはできない」

サスケの未来を全て否定する。

「黙れ……！！」

沈黙が落ちた。
二人は親の仇を見るように睨み合う。
どちらも目を逸らすことはなく、じっと相手の目を見続ける。

先に口を開いたのはサスケだった。

「僕が……俺が！　それは俺が決めること。宗主が考えること……。分家のお前が口を出すべきことじゃない！」

自分が宗主であるという宣言。

このときサスケは【うちは】の宗主となった。

サスケに見えないようにサイゾウはくすりと笑う。

すぐに表情を引き締めた。

「一族を復興させる。俺の手で、だ」

血塗れの手を握りしめ、暗い夜空を見上げて叫ぶ。

先ほどまでの弱音などを全て取り払った、責任を受け入れた男の顔。

「力をつける。何者にも負けない力を……イタチを凌駕する力を！」

重責を自分のものとして取り込んだサスケは、子供ではなくなっていた。

「サイゾウ――お前は俺に従え」

宗主である。【うちは】で最も権限があり、責任がある――絶対の存在。

宗主の言葉は神の言葉に等しい。

逆らうことができるはずもない。

「父母の遺言です。あなたに従うことを誓いましょう。しかし、心折れたときは……」

「殺せばいいだろ。そのときはお前が唯一の【うちは】だ」
「……良き主であることを祈ります」
こうして【うちは】一族が壊滅した夜――新たな宗主が決められた。

終、新たな宗主、始まりの唄（後書き）

次はアカデミー卒業してからの下忍の試験になります。
登場するのは全員原作キャラですが、原作ではほとんど出てきてないキャラばかりですのである意味オリキャラに近いかもしれません。かなりイメージが崩れてしまうかもしれませんが、平にご容赦を。
サスケなんて最初一人称僕にしましたしね。宗主になるという覚悟を決めるまでは弱いキャラでいてほしかったので……。

とまぁようやく長々としたプロローグが終わりました。どうでしたか？　面白かったのなら感想くれても……いや、面白くなかったとしても感想くれれば嬉しいです。０件という数字が私の心をとても痛ませます。くれくれ厨みたいであれですが、この作者が可哀そう……と少しでも同情された方は感想ください。待ってます！

序．名門同士は犬猿の仲

アカデミーの卒業試験を控えた前日のこと。
試験の準備のためだろうか。教師たちは授業を自習にし、いそいそと教室から出て行ってしまった。
がやがやと五月蠅くなる教室の中、一人の生徒が提案する。

「男女別で勝ち抜き戦しようぜ」

アカデミーの正面にある武闘室に場を移し、模擬戦闘が行われた。
しかし、開始二十分にしてお通夜のように鎮痛な空気が漂う場に成り果ててしまった。
武闘室の中央に陣取るのは黒髪の少年だ。
均整の取れた顔立ちは凛々しさと幼さを内包している。
クラスの中では身長は高い方だろうか。団扇の家紋が刻まれた衣服はややだぼっとしているので身体のラインは見えないが、その下には鍛え抜かれた肉体が隠れている。

「またあいつがクラス全員に勝ち抜きかよ」
「勝てるはずねぇよ。化物か……」

十八連勝。
息を乱すことなく、単純作業の繰り返しのように組手の相手から一撃を取り続けている。
頭部への後ろ回し蹴り。鳩尾への正拳突き、胸部への鉤突き――多種多彩な攻撃方法は読むことを許さず、無抵抗を強制する。
少年の名はうちはサイゾウ。
クラス内では圧倒的な強さを誇っていた。
周囲を囲む男たちも既に挑む気力はなく、言いだしっぺの生徒―

―木ノ葉丸のことを睨みつける。

「お、俺のせいかってのかよコレ！」

萎縮気味に叫んだのは木ノ葉丸だ。

やや情けない感じである。

「根性無し」

聞こえた言葉に木ノ葉丸はいち早く反応する。

声が聞こえたのは背後から。

苛立ちが浮かぶ表情のままに後ろを向いて立ち上がると、そこには木ノ葉丸の意中の少女がいた。

日向ハナビ。

木の葉隠れの二大名門の一つ【白眼】の血継限界を伝える【日向】の正統後継者だ。

腰まで届く長い黒髪。可愛らしいというよりも美しさの目立つ造形の顔には厳しく顰められた表情が浮かんでいて、全く余裕がないように見える。特に印象的なのが白色の目。これが【白眼】と呼ばれるものであり、【日向】を名門と知らしめる最も大きな要因である。

千里先を見渡せる。透視することもできる。身体に流れる経絡やチャクラ穴も見ることができる。あらゆる特性を兼ね備えたそれは【日向】の強さを絶対のものにする。

「どいて。私が挑むから」

自分よりも小さな女の子に恫喝されただけで木ノ葉丸は道を開け、他のものも退いていく。

好戦的な態度はその他大勢に向けられたものではなく、サイゾウ

にのみ注がれている。
歩みは止まることなく、武闘室の中央――模擬戦闘を行うための場へと進んでいく。
あと一歩で身体が当たるというところでハナビは立ち止まると、サイゾウのことをキッと睨み上げた。

「日向か。何の用だ」

サイゾウは首を傾げて問うた。腕を組んだまま無防備に、だ。その姿勢がたまらなくハナビを苛立たせた。
アカデミーではサイゾウとハナビは常に同じクラスだ。
男女別の授業が多いことから関わることはあまりなかったが、いつもハナビはサイゾウと比べられていることに気づいていた。
勉強、体術、暗器、忍術、何もかもを第三者に比べられていた。
根っからの負けず嫌いなハナビは過剰な努力をして成績で勝ろうとしたが、どうしても勝つことができなかった。
いくら努力しても打ち勝つことすらできない。それはとても悔しいことだった。が、何よりも悔しいことがあった。
サイゾウは一番を取っても喜ばない。誰かに自慢することもない。それが当たり前のように振る舞っている。
それがたまらなく不愉快だった。
自分が欲しいものをあっさりと取っているくせに勝ち誇ることすらしない。それはある意味美徳なのかもしれないが、ハナビからすれば許せないことだった。
結局アカデミー卒業までに成績で勝つことはできず、どうにもならない気持ちでぶらぶらとしていたのだが……渡りに船とはこの事だろう。
授業での模擬戦闘は男女別だ。自習での今回の模擬戦闘もそうなのだが、いつもと違うところがある。
教師がいない。つまり、多少のルール違反はできるということ。

挑むには絶好の機会なのである。

「気に喰わないの。なんだかたまらなく――無性に腹が立つの。そう、喉に小魚の骨が刺さっているようなちょっとした苛立ち。あなたを見ているとそんな気分になるの」

「知るかよ。八つ当たりか？」

辟易としてサイゾウはうんざりと頭を振る。

「見下してるでしょ？」

「……誰をだよ」

心底わからないといった困惑顔を浮かべるサイゾウをハナビは見据えた。

どうにも理解力が乏しいようだ、とハナビはサイゾウの評価に付け加えた。

「私たちをよ。同級生をよ。つまらない作業のように適当に相手しているように感じてならないわ」

「いきなり難癖をつけにきたのか？　模擬戦は男女別。あんたは女子の集まりに行けよ」

「……女子は全員私が倒したわ。つまり、女子の中では私が一番強いの」

なるほど、とサイゾウは頷いた。

しかし、ハナビが本当に言いたいここからである。

クラスの皆の前ではっきりと宣言しなければいけないのだ。

「私はあなたを倒し、アカデミーで一番強いと言われる必要があるの。何故なら私は日向で、あなたはうちはだから」

これは挑戦だ。

教師たちはサイゾウに一番の栄誉を与えた。体術の成績でサイゾウの方が上だと判断したのだ。

【日向】は名門である。柔拳という木の葉最強の流派を受け継ぐハナビを差し置いてサイゾウを一番だと言っているのだ。

なるほど、確かに強いのかもしれない。

勉強はサイゾウの方が上だ。点数がそれを表している。暗器も上だ。ハナビはどうにも手裏剣の投擲などは苦手だ。忍術も上だろう。ハナビは忍術が全部苦手である。だが、体術だけは違う。絶対の自信を持っている。幼い時分から叩き込まれた技術がある。それを耐え抜いた根性がある。

何より体術を比べるのは簡単だ。

仕掛けてみればいい。

「潰れかけの家系に優秀な血を引く私が負けるわけにはいかない」

「……自分の代紋掲げての喧嘩っていうのなら、俺にも矜持がある。退けなくなるぞ？」

ハナビが喧嘩を売り、サイゾウが喧嘩を買った。

家の名前が出た瞬間、張り詰めた緊張感が武闘室を包み込む。

（これが本気のうちはサイゾウ――うちはの生き残りの片割れ……！）

血が沸き立つ。

なんだかんだと自分自身で理由付けをしていたが、結局のところ――本気で戦える相手を求めていただけなのかもしれない、とハナビは思った。

「その傲慢、叩き潰してあげる」

そうしてハナビはサイゾウへ飛び込んでいった。

うちは転生記――それぞれの誇り――

『すれ違う三人、纏まる三人』

作者：まじしゃんX

木の葉隠れの里の所有する一際大きな山に構えている立派な屋敷が【日向】の住む場所だ。

仰々しく構えられている大きな門には看板が立てかけられており、柔拳とでかでかと書かれている。

門を潜ったところに柔拳の修練を行う修練場があり、そこを真っ直ぐ抜けたところにある屋敷がハナビの家だ。

がらがらと音を立てる扉を開くと、ハナビは今までの疲れがどっと出たのか。靴を脱ぐのすら億劫で、ばたりと玄関に倒れ伏してしまった。

倒れたときの音はなかなかのもので、何事かと出てきた少女がいる。日向ヒナタ――ハナビの双子の姉だ。ハナビよりも少し身長が高く、やや丸っこい身体をしている。柔和な表情がよく似合うオカッパの髪の少女だった。

「ハナちゃん！　大丈夫……！？」
「姉さま……」
ヒナタはハナビに慌ただしく駆け寄ると驚愕の表情を浮かべた。
綺麗な顔のはずのハナビは鼻から血を流していたり、頬に痣が刻まれている。よくよく見れば身体中傷だらけになっていて、むしろ無事なところのほうが少ない。
父との修行を行ったときですらここまで酷い仕打ちはされない。
どういうことだろう、とヒナタは不安になる。
「そんなにボロボロになって……何かあったの？」
「授業の模擬戦で少し……」
潤んだ瞳で見つめるヒナタからハナビはついっと目を逸らす。
【白眼】は洞察する力を増す。ぐっと力の込められたヒナタの瞳はあますことなくハナビの思考を読み取ってしまう。
「ハナちゃんがこんなにやられるなんてない！　ハナちゃんは強いから……」
罰の悪い顔になっているハナビは嘘は言っていないようだった。
だが、本当のことを言っているわけでもない。
だから、ヒナタはこう推察した。
授業中に複数の生徒を相手に戦って、ぼこぼこにされたのではないだろうかと。
「誰かに虐められてるの？」
それを口に出してみたら、ハナビは激しく首を振った。

「喧嘩を売って、負けて、惨めに帰ってきただけなの……」
「えっ？」

信じられない言葉を聞き、ヒナタは一瞬思考停止に陥る。
その間にハナビはヒナタを押し離すと、急いで靴を脱いで玄関に上がった。

「私のことは放っておいて！」

そう言って走り出したハナビの後ろ姿からヒナタは見てはいけないものを見てしまった。

「ハナちゃん……」

確かにハナビは泣いていた。

◆◇◆

ハナビの放つ攻撃は苛烈さはないものの、素早いものだった。
柔拳の特性は筋肉にダメージを与えることに重点を置くのではなく、直接内臓にダメージを与えることに重点を置いている。
経穴と呼ばれる急所にチャクラを流し込み、内臓に直接ダメージを与えることを真髄とした。
そうなると自然に相手に触れるような動きになってしまう。そして、それはとても避けづらい――はずなのだが……、

「柔拳ね。幼い時分から叩き込まれたんだろう。教科書にしたいくらいに完成された動きだ」

そう言いながらサイゾウはハナビの繰り出す掌底を全て避けていた。いや、避けるというよりも逸らしていた。

ハナビが腕を突き出す動作をすればハナビの手首に手刀を与えて線をずらし、蹴りを繰り出す動作をすれば太腿に足を置かれて動き自体を封じられる。

完全に動きを読まれているとしか思えない。

「くっ！」

どんな攻撃をしても相手に届かないことにハナビは焦りを覚えた。そこから完全に崩れたのだ。

大振りになりつつある攻撃の軌道。そしてサイゾウが挑発を交えた台詞を吐く真意。それらに気づけなかったのが敗因と言えば敗因か。

焦り始めたものの攻撃など実に読み易く、サイゾウは瞬時にハナビの懐に潜り込み、道着のような服の襟元を掴んで、身体を反転させる。そのまま相手の腕を自分の肩に乗せて、受け身がとれないように地面へと投げ落とす。

忍術組手の基礎の基礎である一本背負い。

何の捻りもない投撃だが、基礎の技術が高ければ必殺の一撃となり得る。

「ぐぅっ！」

受け身すら許さない特殊な投げを頭部から喰らうのを防ぐため、ハナビは片腕をクッションにした。要するに、犠牲にした。

肩の付根の脱臼。この模擬戦闘中に回復することはない。
壮絶な痛みがハナビに襲い掛かるが、痛がってもだえる暇もなかった。
悪寒を感じてすぐさま転がって避けたが、髪を切る風音がすぐ横を通り抜けた。
蹴鞠を思い切り蹴り飛ばすかのような一撃だった。

「俺の代紋にケチをつけたんだ。手加減はしない」

横たわったまま動こうとするハナビに対し、サイゾウは手を抜くことなどしなかった。
甚振る。
女子の顔を殴ってはいけないと大人に教えられたことなど無視した一撃。腹に向かっての踏みつけ。全く持って容赦ない。
息も切れ切れになったとき、サイゾウはハナビに覆いかぶさり、寝技に入る。
道着の襟元を使って相手の首を絞める。

「何で俺に挑んだのかは知らないけど、彼我の実力差くらいは把握しておけ」

呼吸を許さない。静脈を絞める裸締め。
わずか五秒でハナビの意識は飛んだ。

◆◇◆

自室にある熊のぬいぐるみ。
まるで自分を笑っているように見えて、ハナビはぬいぐるみを思い切り扉に叩きつけた。
ずるずると落ちていく。

「くそ……」

肩が震える。
傷一つ負わせることなくぼこぼこにやられた。
サイゾウに一方的に殴られるだけの凄惨な喧嘩。
あんまりな結果に涙が零れるのが止まらない。
誰にも見られたくない惨めな姿。
布団の上でしゃがみこみ、涙を流す。
そんな姿を最も見られたくないものに見られてしまった。
ハナビの父であるヒアシが扉を開いて入ってきた。
ハナビは鼻から流れる鼻水と鼻血が混じったあまりにきれいとは言えないものを腕で拭う。引き伸ばされて余計に汚くなってしまい、ハナビの涙は量を増した。惨めすぎて死にそうだ。

「どうした、ハナビ。ヒナタが心配していたぞ」
「お父様……！」

ヒアシはハナビの顔を見ないように気遣っているのか、隣にどっかと胡坐を組んで正面を向いている。
時折気遣わしげな視線を感じるが、まじまじと見てくることもない。
その態度が妙に響いた。

「すみません。私は負けました……」

ふむ、とヒアシは考え込むそぶりを見せて頷く。

「うちはのものにか」

「うちはサイゾウ――生き残りの片割れです」

アカデミーの授業参観の日だ。

その日は模擬戦闘や暗器のお披露目などがあり、ヒアシも参観に来ていた。

ハナビの隣で仏頂面のまま授業光景を見ていたが、ぽつりと漏らした言葉がある。

『あの子がアカデミーで一番強いだろう？　頭一つ抜けている。下忍でも十分に通用するだろう……』

滅多に褒めたりしないヒアシが、サイゾウの実力を認めたのだ。

あれからだろう。ハナビがサイゾウに対抗意識を燃やし始めたのは……。

とうとう最後まで成績では勝てなかったから直接対峙したが、結局は敗北だ。

「私は……私が一番強い！　白眼があるはずなのに！　写輪眼を開眼できてすらいないうちはなんかに……！」

写輪眼は強い。とても強い。だから【うちは】は特別視されているのだ。

しかし、サイゾウは写輪眼に開眼していない。言わば普通の人と変わらないのだ。それなのに負けた。

負けたのだ。

「何故一番になりたい？」

ヒアシの声はよく通る。耳の奥に染み込むようだ。
何故だろうか。
ハナビは真剣に考え込む。
負けるのが悔しいから。ヒアシが認めたから。理由はいくらあろうども、やはり原因はこれだろう、とハナビは思う。

「見下されたくないから。私は厳しい修行に……お父様の修行に日々耐えています。それなのに一人で楽な日々を過ごすような輩に負けるなど……そんなことは許容できません！」

仏頂面のままヒアシは顎を手で摩る。
どこか面白がっているように見えた。

「うちはは敵か？」
「敵です。立ちはだかる壁です」
「そうか……ならば楽しみにしておけ」

気炎を吐き出す娘に対し、ヒアシは余裕の体だ。

「何事も経験だ。人は負けて強くなる。不条理な現実を受け入れて大きくなる。小さな殻を破って、大きな殻を形成する。強くなるには不可欠なことだ」
「何を……？」

ハナビにはわからない。父が何を考えているのか、これから何が起こるのか。
自分にとってはあまり良くないことだろうことは想像できるのだが……。

「理不尽なまでに認めたくないだろう現実だ。案外そういうものは近くにあるもので、乗り越える必要がないものもあったりする……」

耳を傾けてみても、やはりハナビのわからないことだ。

遠くを見つめながらヒアシは朗々と語っている。

「ハナビ、私の後を継ぐのは――おそらくお前だ。ヒナタには揉め事などは向かん。人に命令することもできないだろう。だが、ハナビには素養がある」

心構えか、とハナビは感じた。

「納得できないこともあるだろう。そういうときは足掻けばいい。だが、ルールを忘れるな。何事も真正面からぶつかれ。若いときにしかできない。そういうものだ」

「……はい」

話はこれで終わりなのか、ヒアシは口を閉じた。

いや、これで終わらない。

「それにしても、だ」

ヒアシはハナビを見下ろすと、にっと笑う。ハナビもつられて笑った。

「柔拳を学ぶお前が負けたのは由々しき問題だ。早急に解決せねばな」

「……はあ」

「修行だ。絞るぞ」

「はいっ！」

親子二人は修行に勤み、夜が更けていった。

弐．名門を束ねるのは医療忍者

任務明けの疲れからか、ややぼんやりとした思考のままに言われた言葉の意味を反芻するも、どうにも理解できるようなものではなかった。

彼女――リンにとってはどうにも関係性の薄い単語である。そのようなものに関わることになるとは思いもしなかった。

「僕が教師、ですか？」

任務で泥などが付着した汚れた着衣を鬱陶しげに手で払いながら、自分の部屋にある座布団の上で寛いでいる灯影を見据える。

そうじゃ、と大きく頷いたことから本気なのだろうことは窺えるが……、

「他に当たってください。これ以上重荷はいらないです……」

はっきりと断った。

リンは現在の仕事に満足している。やや厳しい任務が多く、命を落としかけたことも両手の指の数では足りないほどにある。しかし、それは彼女にとっては贖罪だった。だからこそ、危険であればあるからこそ、心が安らぐこともある。

そんなリンの内心など看破しているのだろう。火影はリンのことをじっと見つめるが、リンも負けじと視線を返す。

根負けしたのは年老いた老爺の方だった。大きく嘆息する。

「まだあの事件のことを引きずっておるのか……」

リンはさっと視線を外した。罰の悪そうな笑みを浮かべ、ぎゅっ

と拳を握る。

「引きずってないなんて言えませんよ。カカシだってその場で留まりっぱなし……」

「そんなことはない。あやつは前に進もうともがいておる。今日も教師の話を快諾してくれたところじゃ」

「何回目でしたっけ。毎回合格する忍者はいないじゃないですか。教師になる気なんてそもそもないんですよ。あいつはね……」

はん、とリンは火影の言葉を一笑に伏した。

火影もつられて笑った。見下すような笑みだった。

「オビトが死んだのは仕方のないことだった。一つのミスを引きずって、おぬしはずっと立ち止まったままでいるのか？　それでいいのか？　死者はそれを望んでいるか？」

ぎりりと歯が擦れる甲高い音が響く。リンの口腔からだろう。

オビトの名を聞いて怒りを孕んだ双眸を火影へと全力で叩きつけている。殺気混じりの視線はそれだけで人を殺せそうだが、火影はどこ吹く風だ。

暖簾に腕押し。無駄だと悟ったリンは力を抜くと、項垂れた。

「僕が死ねばよかったんですよ。無能の僕が……」

吐露したものは罪悪の塊。

医療忍者であるはずの自分が助けられなかった。つまり、自分のせいで死んだ。リンはそう思い込んでいる。

火影は頑なな部下を見てため息を吐いた。

「結局のところ、死ぬのは弱い奴からと相場が決まっておる。死ん

だのはおぬしのせいではなく、オビトが弱かったからじゃ」

リンの眉間に皺が寄る。

射殺さんばかりのぎらついた眼光が火影を捉えて離さないが、火影は意に介さず、朗々と語る。

「助けられなかったのはおぬしが弱かったから、おぬしの仲間が弱かったから、取り囲む敵が強かったから、それだけの話じゃ。それ以上でもそれ以下でもない。結果が全てを物語っておる」

うちはオビト。

かつてリンと共に任務をこなしていた男の名前である。

確かに彼は弱かった。エリートの家系であるうちはに生まれたものとは思えないほど愚鈍な男。

格闘はダメ。忍術もダメ。戦術もダメ。さらにはそれらがダメな原因を「写輪眼がまだ開眼してないから」という理由にしていた。

リンから見ても情けない男だった。

しかし、最後の最後――死するときは仲間のためであった。

「……挑発しているんですか？　爺……！」

仲間を守るために死んだ。

リンは自己犠牲という行為をあまり好きではない。しかし、尊いことだとは思う。穢されていいものではない。

激情に駆られたリンは知らずのうちに火影の襟元を手繰り寄せて掴み、火影の枯れ木のような華奢な身体は宙に浮く。

だが、さすがは火影というべきか。

火影とは最強の代名詞である。

いくら年を重ねたとはいえ、たかが上忍に好きにやられるほど弱くはない。

「小娘が、誰の胸ぐらを掴んでおる」

胸元の襟を強く握りしめている拳にそっと手で触れると、それだけのことなのにリンは体勢を崩した。

経穴と呼ばれるツボ。それを軽く押しただけだが、しかし、効果は甚大である。

激痛とともに力が抜ける。

あっさりと攻撃を返されたリンは痛む右拳を左手で押さえ、キッと火影を睨みつける。

「一度目は守れんかったかもしれん。じゃが、二度目はどうじゃ？」

「……僕はっ！」

「おぬしは類稀な医療の才を持つ忍者じゃ。その能力を活用し、新たな芽を育む力となる気はないのか？」

リンは首を振るが、火影はお構いなしだ。

「今期のアカデミー卒業生には儂の孫もいる。うちはの分家と日向の宗家もおる。実に先が楽しみな若者たちじゃ。それをおぬしに任せたいと思う」

「……僕には……」

「生きたまま腐るなよ。おぬしは若い。過去のことはどうすることもできんが、これからのことは変えることができる」

好々爺の笑みを浮かべて火影はリンの肩を叩いた。

先ほどまで殺意のこもる視線を送っていたはずなのに、いつの間にかリンの毒気は抜かれている。

「死に急ぐように辛い任務を受ける毎日を打ち切って、先を見る戦

いをせんか？　十年後、二十年後、おぬしの育てた生徒が未来を変える。実に爽快な景色だと思わんか？」

わかりませんよ、とリンは頭を振る。火影は楽しそうに豪快に笑う。

「そりゃそうじゃ！　わからないから未来は楽しい！　そういうもんじゃ！」

沈黙。

リンは火影の言葉を吟味し、座り込んで考え込んだ。

日向の宗家、うちはの分家、そして火影の孫。どうにも引っかかるものがあるのだ。

将来有望な生徒であることは間違いないだろう。何せ日向とうちはだ。どちらも里では有力な家柄で、強力な血継限界を受け継いでいる。火影の孫というものも血統からして相当な才能があるのだろう。そこまではわかる。

しかし。

「何故僕にそのような重要なものたちを任せようと思ったのですか？」

「おぬしなら家の権威などに囚われずに堂々と指導できるじゃろう？　それにこやつらは絶対に死なれてはならない血筋。医療忍者であるおぬしに頼むのは当然だと思うが……」

言葉の裏を考える。

うちはの家はほぼ滅亡していることから権力などはほぼないと言える。それに比べて日向はどうだろうか？　多数の血を残す彼らは里内でも最も権力が強い。そんなものたちに睨まれれば普通の忍では萎縮するだろう。

（……なるほど、だから僕に白羽の矢が立ったわけか。つまり、他の誰もがやりたがらなかったわけだ）

理由は単純にして明快である。

実力のあるものは拒否し、実力のないものには任せられないというジレンマがあったのだろう。

納得してしまえばなんということはないものだ。

面倒な任務を押し付けられた、その程度の認識である。

「わかりました。では、僕の裁量で判断してもよろしいんですね？」

「構わん。全て任せる」

「わかりました」

火影の許しを得たリンは獰猛に笑う。

「……潰れないことを祈っててくださいね」

彼女は後輩にスパルタと呼ばれていた。

うちは転生記――それぞれの誇り――

『すれ違う三人、纏まる三人』

作者：まじしゃんX

（緊張感漂いすぎ……！）

あまりの居心地の悪さに木ノ葉丸は発狂しそうだった。

サイゾウとハナビが互いにそっぽを向いて、背中合わせにして座っている。少し離れたところに木ノ葉丸は座っているのだが、両者から放たれる険悪な雰囲気のおかげで胃が痛くなる思いだ。

教室内には木ノ葉丸を含めてこの三人だけ。

何故こんな特殊な状況になっているのかというと、本日はアカデミー卒業試験の日である。

試験は全員合格ですぐに終わったのだが、それからがいけなかった。

「第十七班はうちはサイゾウ、木ノ葉丸、日向ハナビの三人だ。さて、これですべての班が決まったわけだが、担当の上忍が来るまで教室で待機するように」

担当の上忍――他の班は来たのだが、どうにも彼らの担当だけ来なかった。

待たされる苛立ち。そして前日の諍い。それらがない交ぜになって教室内に不穏な空気が溢れ出す。

さらに不気味なのは全員が無言だということか。サイゾウは黙々と巻物を読んで自己学習に励み、ハナビはちらちらとサイゾウの方を盗み見ながら時折舌打ちを鳴らす。

極めて変な状況である。

とうとう耐えられなくなった木ノ葉丸はサイゾウの隣に移動すると、まずはサイゾウが何を読んでいるのかを見ることにした。『上

級忍術指南――火遁編』と書かれたそれは木ノ葉丸にとって全く見覚えのないものである。祖父である火影の書斎でもこんなものはない。つまり、うちは秘伝の書なのだろうか、と思っていると、サイゾウが書を閉じてじっと木ノ葉丸のことを見ていた。

何か用か？　視線がそう問いかけてくる。木ノ葉丸は口を開いた。

「なあ、うちは――ハナビちゃんがお前のこと睨んでるぞ、コレ……」

「そうだな。睨んでいるな。でも実害があるわけではない」

「この書を安易に覗こうとするな。どうせ理解などできんだろうが……あまり良いことではない」と言うと、サイゾウは再び書を読み始める。印の解説やらチャクラ運用法、火遁の有用な活用法などが詳細に書かれているページをまじまじと見ている。

木ノ葉丸もそういう難解な文章は苦手であり、あえて覗き見ようとは思わない。会話する気のない奴と会話を弾ませようとする努力も好きではない木ノ葉丸は少し距離をとって教室の壁に背をもたれて座り込む。

すると、視界に変な光景が見えた。

サイゾウの後ろに立ち、もじもじとして口を開こうとしてはどもり、手を差し出そうとしては引っ込めるという奇怪な行動を繰り返す少女――ハナビである。

何かを強く決意したのか。真っ白な瞳に頑なな意思を光らせると、胸元でぎゅっと両手を握りしめ、大きく息を吸った。

「うちはサイゾウ！」

とても大きな声が教室に響く。五月蠅そうにサイゾウは柳眉を逆立てて振り向くが、肩で息を吐くハナビを見てぎょっとした。必死

な光を湛えた双眸を向けてくるのだ。さぞかし驚くだろう、と木ノ葉丸は思う。

「昨日は私の負けよ。認めるわ」

「……完膚なきまでに叩きのめしたからな」

サイゾウの言葉にハナビの口角が若干引き攣った。

しかし、負けたのは事実である。悔しさを飲み込んだ。

勝気な表情を浮かべると、はんと鼻息を鳴らす。そして座り込んだままのサイゾウの顔を指さし、高らかに叫んだ。

「でも、昨日の出来事は始まりに過ぎないわ。私があなたに勝つための布石なの。物語のプロローグのようなものよ。エピローグは私の勝利で締め括られるわ」

「お前の描く夢物語は永遠に未完のままだろうな。何せ俺が負けるなどありえないのだから」

「……二回戦をここでしてもいいのよ？」

「今度は骨でも折ってやろうか？　間違いなく心も折れるだろうがな」

険悪なムードである。今にも殴り合いが始まらんばかりの一触即発な状況。

傍観者を決め込んでいた木ノ葉丸もさすがに放置するわけにはいかないと思い、即座に両者の中に割り込むと今にも飛びかからんとする二人の必死に肩を抑えた。

「やめやめ！　喧嘩はやめ！　俺たちはこれから仲間になるんだぞ、コレ！　教師が来るまでくらい仲良くしよう！」

「相手に仲良くする気がなさそうだが……」

先に矛を収めたのはサイゾウだった。

「ふん！」

納得がいかないと言わんばかりにハナビは腕を組んでサイゾウを睨みつける。サイゾウは辟易としてため息を吐いた。

これから仲間になるはずの三人のはずなのに、どうにも仲が悪い。木ノ葉丸は泣きそうだった。

（この三人でやっていけるのかな、コレ……）

全く自信がない。

おそらくサイゾウは仲が悪いなど関係なしに任務をこなすと思えるが、ハナビはどうもわからない。木ノ葉丸から見て魅力的な女子のハナビではあるが、アカデミーでは少々孤立していたきらいがある。何せ日向の跡取りである。対等の立場で付き合える学友が存在しなかったのだ。

唯一対等だったのがサイゾウであるが……。

木ノ葉丸は良いことを思いついたと言わんばかりに表情を輝かせた。

「うちは、お前謝れよ」

「俺は悪くない」

策は一瞬で崩壊した。

「ハナビちゃ～ん！」

「気安く呼ばないで。なんであなたに名前で呼ばれなきゃいけないの？　不愉快だわ」

ハナビには名前を呼ぶことすら拒否された。
木ノ葉丸は軽く凹むと地面に『の』の字を書き始める。ひどく惨めである。

「そうだ。俺がこんなに気苦労しなきゃいけないのは担当の教師が遅いからに違いない。他のみんなはもう担当来てるのに何で俺たちだけ待ちぼうけなんだー！」

八つ当たりの結論に達したそのとき、教室の扉が音を立てて開かれた。
入ってきたのは肩ほどまで髪を伸ばした金髪の女性である。温かみのある顔立ちは内面の優しさを象徴しているかのようで、いかにも良いお姉さんといった印象を与える女性だった。

「こんにちはー、君たちが僕の担当になるのかな？」

教壇まで来ると、三人を見下ろす。
にやにやと笑っているのはまるで悪戯っ子の笑みだ。

「あんたは？」

サイゾウが問う。年上に対する敬意の見られない台詞だが、警戒心を露にしているだけなのだろう。
女性はふっと笑うとぺこりと頭を下げて、再び笑った。

「これから君たちの担当教諭になる可能性のあるものだよ」

あー、と口ごもる。時計を見て「あ、遅れてごめんね。機嫌悪いのも仕方ないよね」と砕けた謝罪をした。

「遅れたのはね。教師になることを火影様に命令されたのがつい二時間前くらいでね。おかげで君たちのことを全く知らない。だからさ。自己紹介も兼ねて一杯やりながら屋上で話すのなんてどうかな？　夕焼けが綺麗だし、風が涼しい」

ついておいで、と手招きすると女性はそそくさと教室を出て行った。

三人は呆気にとられて女性が出て行った扉を見ていた。

「物凄くマイペースな人だな」

「俺はああいうやつは苦手だ、コレ」

サイゾウの言葉に木ノ葉丸は頷き、

「先に行ってるわ」

ハナビはさっさと教室を出て女性を追った。ついでサイゾウもポケットに手を突っ込んでのらりくらりと歩き出す。

一緒に行くという発想のないものたちだった。

「先が思いやられるぞ、コレ……」

木ノ葉丸がそう独白したのも無理からぬことか。

とりあえず、こうして十七班はようやく全員がそろったのである。

弐．名門を束ねるのは医療忍者（後書き）

リンの苗字って何なんでしょうね。調べてもわからない。もしかしてないのかな。あと木ノ葉丸の苗字も何でしょ……

ってお気に入りが１００件超えてる！ありがとうございます！頑張ります……！

参．名門の自己紹介、とても不器用な人間関係

全員が顔を揃えたとき、既に太陽は傾いていた。
閑散とした屋上には涼風が吹き、雲間から差し込む赤々とした光が一同を照らす。
逆光になるように立っているリンは特に何もないようだが、リンの前に相対して立っているサイゾウたち三人は眩しそうに眼を細めた。

「全員揃ったね」

リンはにこりと笑ってそう言うと、三人の前で胡坐を組んで座った。サイゾウたちもリンに習って胡坐を組んで座り込み、じっとリンの挙動を窺っている。

「さて、自己紹介と行こうか。僕の名前はリン。好きなことは食べ歩き。嫌いなことは――特にないかな。というわけで君からどーぞ」

指名を受けたのはサイゾウだ。
表情を引き締めるとハナビと木ノ葉丸をちらりと横目で見て深呼吸をし、大きく息を吐き出した。次いでリンを見る。
サイゾウは何かを考え込むように顎に手をやると、ふむ、と再び小さく息を吐いた。何を話すかを考えているのだろう。

「……うちはサイゾウ。好きなことは修行。嫌いなことは怠惰な生活」
「真面目だねぇ。さすがはアカデミー最高峰の優等生」

優等生という単語に反応し、サイゾウは大きく頭を振った。

「飛び級すらできない凡人ですよ」

本当に優秀なものはアカデミーに残ることを許されない。飛び級制度を活用してどんどんと上へと昇っていく。これは事実だが、そんなことを考える人は稀である。

リンは推測する。飛び級制度とうちはの一族の関連性を。

（……過去にあったうちはの悲劇。それらを起こした張本人との比較かな）

身に余る高い志は時に人の心を蝕む。

表面上は取り繕っているようだが、リンからすればサイゾウは切羽詰まっているように見えた。

そんなサイゾウのことをじっと睨んでいるのはハナビだ。

白眼を使って深層心理すらも読み取ろうとしているのか、何もかもを覗き見るような眼をしている。

いじり甲斐がありそうだ。

「次はそこの白眼の君。ずっとサイゾウくんのことを見つめてるけど惚れてるのかな？」

「ち、違うわ！　殺意を篭めてライバルを睨みつけているだけよ！」

「僕の勘違いみたいだね。ごめんごめん。じゃあ自己紹介をどーぞ」

ハナビは顔を真っ赤にして身体全身で否定する。

日向家は血を薄めないために度重なる近親婚を繰り返してきた一族である。白眼という血継限界を弱めないための処置だが、その代償として弊害が起こっていた。

何よりも能力を優先したせいで、近親婚による感情の不安定さを顕著にしてしまう。そして、そのような自由のない家風は自然と人

の精神的な成長を阻害する。
そんな家系で育ったはずなのに感情を露にするハナビは本当に面白いとリンは思う。
などということをリンに思われているとは知らず、ハナビは居心地悪そうに咳払いをして気を取り直した。

「私は日向ハナビ。好きなことは勝利すること。嫌いなことは敗北すること。嫌いな人は私に初めて泥をつけた男よ」
「……日向に睨まれるとは不幸な男だな」
「あなたのことよ！」
「よせよ！　喧嘩なんて面倒なことあとにしろよ、コレ！　今は自己紹介だろ！？」

ぽつりと漏らしたサイゾウに対しハナビは気炎を吐き散らす。それを木ノ葉丸が止めた。
どうにも凸凹な三人組である。

「じゃあ最後に君、どーぞ」

にこにこと笑ったまま、リンは木ノ葉丸に自己紹介を促した。

「猿飛木ノ葉丸！　好きなことはド派手な忍術を覚えること。嫌いなことは勉強！　本を読まされるなんて死んだほうがいいぞ、コレ」
「ありがとう。君たちのことはよくわかったよ」

この三人を受け持つにあたってリンは火影から資料を手渡されている。
資料の内容は三人のアカデミーの成績。それらに付随する協調性などの性格診断。忍術の適正などを事細かに書かれたものである。
通常の生徒ならばそこまで細かく査定されないが、何せこの三人

は特別だ。
うちはの生き残り。日向の宗家。火影の孫。
木の葉隠れの里からすれば未来の大黒柱になり得る逸材である。
それらの資料を照らし合わせ、実際に見た感想を述べるとすれば
――

（ハナビちゃんは随分とプライドが高いね。ライバル視しているサイゾウくんに見向きすらされなくて痛く誇りを傷つけられているようだ。そして最後の子――木ノ葉丸くんが調停役。ある意味ではバランスが取れているみたいだけど、危うい……）

あまり良くない結論が出た。
おそらくサイゾウは任務の命令ならばどんな嫌っているものとでも協力するだろう。割り切る、という忍にとってとても大事な資質を持っているように見える。しかし、致命的なのは歩み寄るという行動がないことだろうか。相手を理解する気がさらさらないように見えた。
次にハナビ。彼女はとても誇り高く、おそらくはその高いプライドをへし折られた経験があまりないのだろう。唯一折ったサイゾウのことを敵視――というよりも意識しているようにリンには見えた。
木ノ葉丸は言うまでもなく、この中では一番協調性があるように見えた。一番気苦労しそうなタイプだ。
三人の顔を見渡す。
見れば見るほど元気が有り余っている三人だ。若いうちはこんなものなのかもしれない。
リンは嬉しそうに白い歯を見せた。

「なるほどなるほど。もしかしたら僕の部下になるかもしれない君たちはなかなかに面白いね」
「……なるかもしれない、とはどういうことでしょうか？」

言葉の中に隠された刺にいち早く反応したのはサイゾウである。
リンは意地悪く口角を釣り上げ、意味深に間を持たす。

「明日、試験を課す。君たちがそれをクリアできれば晴れて下忍。クリアできなければもう一回アカデミーで頑張ってもらうよ。留年ってやつだね」

端的な説明である。

「……日向の跡取りの私が留年なんて許されないわ」
「絶対に嫌だぞ、コレ！」

ハナビと木ノ葉丸は顔を蒼白にして動揺している。
リンからすれば予想通りの反応だ。もしかしたら留年させられるかもしれないなど、とてつもない重圧のはずである。
しかし、一人だけ全く無表情のまま反応がない。

「サイゾウくん、君はあまり動じてないね？」
「何故動じる必要があるんですか？」
「君と同じ班の二人は多少は驚いているよ？　何故そこまで冷静なんだい？」

ふむ、とサイゾウは考え込む。
わからない問題を解こうとしているのではなく、どうやって解き方を教えるか、と悩んでいるようにリンには見えた。おそらくは思考を整理しているのだろう。

「……俺は【うちは】です。里で最強の血を継いでいる。その俺が……下忍になる試験に落ちるなど許されないし、ありえない。だか

ら合格するという選択肢しか用意されていないんです。ここでオタオタとしてもその事実は変わりはしないし、変わってはならない」

決定的な思い違いをしていたとリンは思った。

自己紹介のときにサイゾウは自己の評価を謙遜して語った。それは自信があまりないからだろうとリンは思っていたのだが、それは勘違いだった。

強烈な自負心。【うちは】という家系に対する強い思い入れ。おそらくはそこから来る謙遜だったのだろう。

未だに【うちは】を名乗れるほどの実力はないけれど、それでも【うちは】に名を連ねているという事実がある。だから負けることは許されない。

そのような決意が垣間見えた。

リンはこのようなタイプは嫌いではない。嫌いではないが、嫌な記憶を思い起こさせる。

「君の一族に対する想いはわかった。けれど、それはいつか君を破滅に追い込むよ」

人生の先輩からの忠言。いや、忠告か。

その言葉にサイゾウは疑問符を浮かべることすらなく、儚く笑んだ。

「既に破滅してますよ。破滅しているからこそ、ここから始まるのは再生です。それ以外にありえません」

危うい姿勢がどうにもリンの心をざわつかせる。

遠い記憶の彼方。フォーマンセルを組んでいたうちはの一人。

サイゾウを見ているとそいつのことをどうしても思い出してしまう。

「君は……」
「リン先生！　どんな試験なのか教えてくれ、コレ！　筆記試験か！？」

再び言葉をかけようとしたそのとき、横やりが入った。
少しだけ嫌そうな表情を浮かべてしまったリンだが、すぐに思い直すと笑顔に戻す。
サイゾウと昔の仲間は違うし、あまり深く踏み込むべきことではないと思ったのだ。

「そうだね。詳細は詳しく教えられないけど、実技とだけ言っておくよ」
「実技ね。それなら落ちることはありえないわ」

ハナビが安堵して胸を落ち着かせる。
リンは思い出した。確かハナビの筆記試験の成績はかなり残念だと。

「とりあえず用紙だけ配るよ。明日、ここに書かれている場所に来て。用意するものも全部書いておいたから。それじゃ！」

そう言ってリンは立ち去る。
これから用意すべきことはたくさんあるが、何よりもしなければならないことがあった。
過去の幻影との決別。左右されないように見つめること。
避け続けていた場所にリンは向かうことにした。

リンがいなくなった途端に個々人で動き出したハナビとサイゾウを呼び止めるのはとてもたいへんなことだった。
木ノ葉丸の涙なしでは語れないほどの努力でどうにか呼び止めることに成功はしたのだが、

「ハナビちゃん、うちは……作戦会議するぞ、コレ！」

と言った途端にハナビは嫌悪を露にしてサイゾウを睨みつけた。
サイゾウはハナビからぷいと顔を背けた。

「遠慮しておくわ。馴れ合う気はないもの」
「ハナビちゃん！」

ふんとハナビは鼻息を鳴らし、踵を返して歩き出した。向かう先は屋上の出口である。
助け船を求めようと木ノ葉丸はサイゾウに目で訴えかける。

「そうだな。各自の戦力くらいは把握しておくべきだ。そうじゃな

いと最低限の連携を取ることができない」
「さすがはうちは！　わかってくれるか、コレ！　じゃあハナビちゃんを止めてきてくれ！」

それは嫌だ、とサイゾウは断固拒否した。ハナビのことが苦手なのだろうか。心底嫌そうである。

「三人いないと作戦会議も何もないぞ、コレ！」
「じゃあ打ち合わせはなしだ。俺も帰る。修行しなければいけないしな」

サイゾウは屋上のフェンスを飛び越えると、そのまま地面へ落下していった。
ここは五階である。容易に飛び降りれる高さではないが、途中途中にある木の枝などを利用して器用に地面に降りてしまった。
そして振り向きもせずに帰路につく。

「うちはー！」

結局、作戦会議が行われることはなかった。

◆

鴉が鳴き始める夕刻。
サイゾウとサスケは【うちは】の屋敷にある修練場で汗を流していた。
ゆっくりと身体を動かす演武。型をなぞるだけの動作であるが、実力が拮抗していないとどこかに歪が出てしまう。
演武を初めてかれこれ一時間が経つ。その間ずっと流麗な動き、かつゆっくりとできるということは二人の実力が似通っているとい

うことだ。

「サイゾウ、今日はどうだった？」

拳をゆっくりと突き出しながらサスケは問うた。

修行をしながら会話をしようということなのだろう、とサイゾウは察する。

「卒業試験は合格し、担当上忍と会いました。明日に下忍になるための試験があるそうです」

拳を避けると、サイゾウは顎先を狙ったけりを繰り出す。

「そうか。俺もだ」

上半身をのけぞらせると、ぎりぎりの距離でけりをかわす。

修行は終わりだ、とサスケは告げてサイゾウにタオルを手渡した。

二人並んで歩きだし、修練場の隣にくっついている井戸の前で思い切り水を引っかぶると、タオルで身体を拭った。

サイゾウはこの瞬間がたまらなく好きだ。

汗を思い切り流し、そのあと身体の汚れを水で流す。とても気持ちいい。

「いいか。俺たちには回り道をしている余裕なんかない」

「わかっています」

目を合わせることなく、サイゾウは頷いた。

「あれから二年。俺たちは強くなった」

「ですが、まだまだ弱い」

「そうだ。まだ弱い。だからこそだ。だからこそ下忍になって早く実戦経験を積みたい」
「そうですね。私たち二人だけの修行にも限界がありますし、命を懸けた実戦ほど己を磨く術はないでしょう」
「……イタチは誰よりも率先して任務についていた。だからあれだけ強くなってしまった。だからこそ、俺はその跡をなぞる」

危険な匂いを漂わせるサスケ。
日増しに渇望が深くなっていくのがサイゾウにはわかる。焦っているのだろう。
そしてようやく下忍になれるというときに試験を課される。焦燥感が募るばかりだ。
しかし、それらが終わればようやく任務につけるというもの。

「微力ながらお手伝いさせていただきます」

命がけの修行ができるのだ。
そうすれば飛躍的に強くなれるはず。
つまり。

「イタチを殺す」
「……はい」

実力をつけ、イタチを殺す。
まず最初はこれだ。これをしないと二人は前へ進めない。

「必ず実現するぞ」
「わかっています。必ずや実現しましょう」

ようやく二人は目を合わせ、頬を緩ませた。

生き残った二人。思うことがあるのだろう。赤の他人には見せない隙だらけの表情だ。
二人は仲間であり、家族だった。

「今日はこれで切り上げだ。俺は座学に戻る。お前は好きなことをしておけ」

サスケは髪を拭いながら屋敷の方へと歩き出す。
サイゾウはどうするか、と赤くなっている空を見上げていた。

「……明日、試験か」

運命の日。
絶対に受からなければならない。
なぜなら【うちは】は最強の血族。失敗は許されないのだから……。

参．名門の自己紹介、とても不器用な人間関係（後書き）

お気に入りが２００超えてる！ありがとうございます！！

どうにも小説の中で語り切れていない部分があるようですので、わからないところがあれば質問いただければ答えます。ハナビやら木ノ葉丸やリンなど勝手に変えているところがありますしね……。

四．名門一人、どつぼに嵌る

朝日が眩しい時間帯に木ノ葉丸ら三人は里から少し離れた森の中に集まっていた。

ピリピリとした緊張感を纏う余裕なさげな表情のハナビ。欠伸をかみ殺す木ノ葉丸。そして、無表情によく似た笑みを浮かべるリン。サイゾウはまだ来ていなかった。

「サイゾウはまだかよ、コレ」

腕につけた時計を凝視して、再び欠伸をかみ殺したのは木ノ葉丸だ。実に眠そうである。

「あいつなしで始めない？　待つのにも飽きたわ」

「それは困るね。一応僕も仕事でやっているから、滞りなく試験を終わらせたいんだ」

「けど、試験時間になっても来ていないわ」

「あと三分で試験時間だね。まだ試験時間にはなっていないよ」

ハナビは柳眉を逆立ててリンをキッと睨みつける。リンはどこ吹く風で受け流している様が余計にハナビの神経をささくれさせた。

自然と身体は前傾姿勢になり、拳に力が漲り、前足にかかる体重の負荷が増える。今にも襲い掛からんとする肉食獣の威嚇によく似ていた。

一触即発。

試験のせいで緊張しているせいもあるだろうが、ハナビはどうもリンが嫌いだった。気に入らなかった。

喧嘩を売る理由などそれだけで十分である。

リンも受けて立つのか、ハナビを見下ろす視線に冷たさが混じり

始める。格下相手の舐めきった視線。それはハナビをたまらなくむかつかせた。
常ならば木ノ葉丸が止めに入るのだろうが、寝不足なのか。いつもより判断力が低下している木ノ葉丸は目を閉じて佇んでいるだけ。止めるものはいない。

「待たせた。寝坊したせいですっかり遅れかけたみたいだが、時間ギリギリで間に合ったみたいだな。重畳だ」

暴発しかけの爆弾。
そんな張り詰めた空気に水を差したのはサイゾウだった。
急いで森の中を駆け抜けてきたのだろう。いつも着ている灰色のジャケットにはそこらに生い茂る木々の葉がくっついている。髪も逆風のせいで飛び跳ねており、額につけている木葉の額当てが丸見えになっていた。

「で、なんか妙な雰囲気だけどどうかしたのか？」
「うるさいわね。あなたが遅刻したからいけないんだから」

攻撃的な空気が一気に霧散した。
ハナビとリンは臨戦態勢を解いたのだが、途中参戦したサイゾウにわかるはずもない。
とりあえず。

「さてさて、木ノ葉丸くんも起きて、ね」

額当ての上からデコピンを食らわされ、木ノ葉丸は吹き飛ばされた。
木の幹に背中をしたたかに打ち付けて、木ノ葉丸は激痛のあまり目を覚ます。

ここはどこだ。何をされた。
意味不明な状況に陥ったもの特有の焦りで周囲を見ているようだが、何も理解できていないようだ。

「みんな揃ったし、試験の説明をしよっか」

木ノ葉丸から見えたのは青ざめるサイゾウとハナビ、飄々としているリンだけだった。

うちは転生記――それぞれの誇り――
『すれ違う三人、纏まる三人』

作者：まじしゃんX

「テストは簡単。この洞窟に入って向こう側に抜けるだけ」

リンがそう言って指さした先には何の変哲もない洞窟の入り口があった。入り口の脇には『立入禁止』と赤い文字ででかでかと書かれた看板が立っているのが何とも乙である。
如何にも危険ですよ、と教えてくれている親切な看板をリンを除く三人は凝視し、次いでリンに疑わしげな視線を向けた。

引率のリンはこれを堂々と蹴り倒し「何もない。ここには何も立ってなんかいなかったんだよ？」と笑って一同を振り返る。
何とも言えない状況ではあるが、木ノ葉丸は掌を叩いて喜んだ。

「むちゃくちゃ簡単じゃねーか、コレ！」

洞窟を抜けるだけ。
もっと難しい試験をさせられると想像していた木ノ葉丸は心底安堵した。
ハナビは白眼を凝らして洞窟の中を覗き見ようとしているが首を傾げるだけだ。

「まあ俺は行くぞ！　お前らついてこい！」
「待って。私もついていくわ」

木ノ葉丸が先頭を切り、ハナビが後を追っていく。
その姿をリンは微笑ましげに見送って、未だにその場に留まっているサイゾウを見下ろした。

「サイゾウくんは急いで行かなくていいのかい？　はぐれてしまうよ」
「……あんた、性格最悪って言われないか？」

闇によく似た深淵の双眸がリンをとらえるが、リンはのらりくらいとかわし続ける。
詮索は無意味なのか。年季が違う。

「いいさ。乗り越えてやる。逃げてばかりじゃ何も変わらないしな……」

そうしてサイゾウも洞窟の中へと足を進めた。

◆

洞窟の中は緩やかな下り道になっていた。
光はほとんどなく、あるといえば洞窟の壁にはりついた光る苔くらいだろうか。微々たる光なので足元すら覚束ないが、これでもないよりましだ。
道は存外広く、大人が十人ほど並んで歩ける程度の幅がある。
さて、そんなところを木ノ葉丸とハナビは歩いていたのだが、終始無言だった。耳に届くのは反響する足音だけ。
だんだんと不安になってきた木ノ葉丸はよく見えない後ろを振り返ると、いるはずのハナビに問いかける。

「暗くて何も見えない。ハナビちゃん、白眼で何か見えない？」

歩みを止めて返答を待つが、返事はない。

「……ハナビちゃん？」

再び呼びかけるが、響くのは自分の声だけだ。
心臓の鼓動が速くなる。
手足に冷や汗が流れる。
息が少し荒くなる。

「あれ、どこいったんだコレ」

不安紛れに独白するも、何も変わりはしない。
まわりには何もない。気配すら感じない。声もなく、音も——
不意に耳に何かが届いた。それは奥から聞こえてくるもの。

後ろを振り返るもやはりハナビはおらず、もしかしたら先に行ってしまったのかもしれない、と木ノ葉丸は考える。
そうして足早に進んでいくも、特に弊害はなく、音源までたどり着いた。
そこにいたのは苔から出されるおぼろげな光に照らされた少女だった。
ここらではあまり見かけない金髪は腰ほどまで伸びている。とてもきめ細やかで、光に照らされて輝いて見えた。
顔の造形もとても整っており、瞳が大きく、唇は愛おしさすら感じるほどに柔らかそうな桃色だ。
華奢な体躯ではあるが、胸はそこそこに育っており、それを隠すのは真っ白なクローク。
はっきり言って木ノ葉丸の好みど真ん中である。
思わず咳払いをして乱れた衣服を整える。男前度が三は上がった。
そうして話しかけようと木ノ葉丸は少女に近づくが、

「……誰？」

咳払いで気づいたのだろう。少女は声を震わせて木ノ葉丸を見上げていた。
大きな青い瞳が潤んでいる。胸がキュンとした。
これ以上怯えさせてはいけない、と木ノ葉丸は心の底から思い、できるだけ警戒心を抱かれないように満面の笑みを浮かべる。

「俺は木ノ葉丸！　とびっきりの忍者――になる予定の男だ、コレ！」
「忍者？」
なにそれ？　と少女は首を傾げる。

「すっごく強いんだぞ！　忍者はつえぇんだ、コレ！」

木ノ葉丸は胸を張って答える。

少女はくすりと笑うと木ノ葉丸の手をぎゅっと握った。

細く長い指が手に絡まる感触は何とも言い難い。

「じゃあさ。私のこと、守ってよ。強いんでしょ？」

もちろん！　と木ノ葉丸は何も考えずに答えるも、よくよく考えればわからないことだらけである。わかっているのは少女が自分好みの容姿をしているということだけだ。

「守るって何から？」

瞬間、少女は表情を曇らせた。

がたがたと身体を震わせ、木ノ葉丸の背後を凝視している。

木ノ葉丸も振り返るが、それを見たと同時にすぐに腰のホルスターから苦無を取り出していた。

危険だ、と脳が囁いたのだ。

目に映るのは異様に筋肉が発達した人型。しかし、頭からは大きな角が生えており、まるで鬼のようである。

見るからに強そうだ。勝てるかどうかもわからない。

ふと、ここで思い浮かんだ。何故リンが試験にここを選んだのか。

「こういう類がいるからか、コレ？」

試験は洞窟を潜り抜けること。決して鬼退治ではない。

だが、背後には守らなきゃいけないと思える女の子がいる。それに背を向けて逃げ出すなどありえない。

「守ってくれるの？」
「終わったら理由を聞かせろよな。ここが何か。そしてお前が誰で、何で襲われてるか」
返ってきたのは沈黙。
相手が答えるのを待ってからでもいいが、敵は待ってくれそうにない。
隆起した筋肉をより一層膨張させ、鬼は木ノ葉丸に飛びかかった。
「来いよ、化け物。火影の孫舐めんなよ！」
苦無を投擲して迎撃する。
こうして試験は始まった。

◆

ハナビは木ノ葉丸とはぐれても全く落ち着いていた。
白眼を凝らして周囲を探ることに集中していたということもあるし、そもそもとして木ノ葉丸は自分より弱いのだ。一緒にいたからといって頼りになる存在ではない。
だから逆に動きやすいのだが。
「結界？　それも強力な幻術結界。白眼がなかったら騙されていたかもしれないわね」
状況は芳しくなかった。
白眼は本来なら透視や千里眼の力を持っているのだが、どうにもここでは効果を発揮しないらしい。
見えるのはせいぜい光に照らされている場所だけなのであまり役には立たない。いや、それでも視野がとても広いので普通の目より

はとても優れていることに違いはないのだが。
その原因は何故か。
ハナビはこういうことを経験したことがないからいまいち確証は掴めないが、おおよその見当はつく。
人によってチャクラの性質は千差万別。完全に同じ性質のものはない。白眼である程度の性質を図れるハナビは、術の痕跡のようなものを確かに感じ取っていた。
誰かの手を加えられているのだろう。

「リンって忍者がやった？　いや、それはない。チャクラの気配からして同質のものじゃない。つまりは他人のものとなるのだけれど……」

強力な結界忍術である。少なくともハナビには使うことができない程度には上級な類。
もしかしたら術者が洞窟内部に潜伏しているかもしれないと考えると、鳥肌が立った。
白眼を遮るほどの術を行使できるとなると実力は確実にハナビよりは上だろう。

「結界のせいで遠くが見えないわね。木ノ葉丸と……うちはもか。はぐれてしまったのは致命的かもしれない」

やれやれ、とハナビは大仰に肩を竦める。

「だからこういう歓迎はあまりよろしくないわね」

目の前にいたのは捻じれた角をはやしている異常に筋肉が発達した異形。明らかに人間ではない。
息を乱し、充血した眼でハナビのことを視姦しているのか。不細

工な面が醜悪に歪む。

「吐き気がする」

あまり目に良いものではないのは確かだ。

だが、相手は一向に動こうとしない。

苛立ちが募る。

基本的にハナビは短気だ。

つまり。

「％＆◆¥―！」

「日本語をしゃべれ！　化け物！」

自分から拳を振り上げ、振り下ろす。

あれだけ大きな体躯ならば懐に入れば有利だろうし、柔拳の前では分厚い筋肉などただのハリボテである。

内臓は誰も鍛えられない。

しかし、繰り出す連撃は相手をとらえることはなく、攻撃全てを撃ち落とされる。

見た目は筋肉馬鹿のくせに、随分と技術があるようだった。

「手強い！」

相手の大きな腹に蹴り足をぶち込み、その衝撃の反動で跳躍して距離を取る。

「授業じゃこんなの習わなかった。妖怪退治になるのかしら。陰陽師になる修行も開始したほうがいいのかもしれないわね」

距離を取って独白した。熱くなった頭を冷やすために必要な作業

だったのだが、隙を突かれたのだ。
異形の見た目には似つかわしくない俊敏な踏み込み。
彼我の差を僅か一足で縮めると、異形はハナビの頭を鷲掴みにして何かを言っている。

「しまっ……！」

正直なところ、ハナビは死を覚悟した。
せめて自分を殺す輩を目に焼き付けようとそれを凝視したのだが、

「幻術返し！」

異形が唐突にそう言うと、視界が途端に透き通った。

「あれ、うちは……？」

異形は掻き消え、サイゾウになった。
頭を鷲掴みにしていた手は離され、ハナビは腰砕けのように地面にすとんと腰を落とす。落ちたと言ってもいい。

「一度戦ったことがあるだろう。拳を合わせた時点で気づけ」

どうやら自分は幻術にかかっていたらしい、ということに気づいた。
白眼があるのに幻術にかかる。こんなことがバレたらおそらくヒアシに八つ裂きにされることだろう。恥を知れ、と。
これは墓まで持っていく秘密にしよう、とハナビはこっそりと決めた。
そしてサイゾウを見上げる。
何故サイゾウは幻術にかかっていなかったのか。写輪眼の力か。

いや、見る限り目は普通に黒いままである。写輪の紋様は浮かんでいない。

（実力の差……？）

ハナビは考えるのを止めた。

地面から伝わる温度でお尻が少々湿ってきたので立ち上がり、汚れたズボンを手で叩き、サイゾウを睨みつけようとして――目を逸らした。

「……ふん、ちょっと焦ってたから気づかなかっただけよ」

「焦りは禁物だ。アカデミーで一番最初に習う忍びの心得に書かれていたろう。平常心を失えば即死に繋がる、ってな」

「あなたはいちいち小言がうるさそうだわ。女にモテないタイプね」

「ちんちくりん相手に好かれようとは思わないだけだ」

ハナビは怒り心頭で顔が真っ赤になっているが、多大なる自制心でそれを抑えた。

しかし発散される空気はまさに絶対零度。

空気は凍ったが、それだけで終わるハナビではない。

「わからないのだけれど、ちんちくりんって誰のことを言ってるの？」

気焔すら混じる吐息にはしかし、冷徹な答えが待っているものだ。

「凹凸の少ないことで」

サイゾウはようやくハナビの方を見ると、胸元をじっと見て言った台詞。正しくセクハラである。

ハナビはさっと胸元を両手で覆い隠した。

「そのうち育つのよ！」

「だろうな。何年かすれば立派なレディになるだろう」

この話はこれで終了と言わんばかりにサイゾウは手を振る。

どうにもこういう話題は苦手だし、今はせねばならないことも多い。

とりあえず思いつくことといえば、仲間全員が集合することだろうか。

幻術にかかって同士討ちなど笑い話にすらならない。

「ところで――木ノ葉丸はどこだ？」

「はぐれた」

同士討ちがあり得る話になってしまった。

「はぐれたぁ！？　あいつが一番幻術にかかりそうだろう。なんで目を離した？　白眼でここらを見渡すことはできないのか？」

「千里眼の系統はできないように何かしらの細工をかけられているわね。それと目を離したって言うけれど、私は保護者じゃないわ。そこまで面倒見きれるはずがないじゃない」

「報われないな……」

木ノ葉丸がハナビを好きだということを知らない同級生はいない。態度からしてばればれなのだ。

ハナビはどうやら気づいていないのか、それとも気づいていてここまで冷淡な態度がとれるのか。

実際のところ、ハナビは気づいていないだけなのだが。

「何よ？」とサイゾウのことを見返す。本当にわかっていないので

ある。
はあ、とサイゾウはため息を吐くと、お互いの確認のためにバックパックを取り出して中身を披露した。
中にあるのは小さなメモ帳と筆記用具、包帯に傷薬、ワイヤーに兵糧丸などのサバイバル用品のようなものばかりだった。

「試験ってことで道具を用意してきたはずだ。何を持ってきた？」
「苦無や起爆札。あとは投擲用のワイヤーと保存食、水くらいね」

対するハナビは戦闘向けのものばかりである。
それも仕方のないことだろう。

「……白眼なんていう便利なものがあるんだから、当然なのかもしれないな」

千里先を見渡せるような目があるのである。そもそもとして他人よりも圧倒的なアドバンテージがあるのだから攻撃的な道具になるのも無理からぬことだ。

「どういう意味よ？」

ハナビの詰問をサイゾウは黙殺すると洞窟の壁に苦無で文字を刻む。
刻んだのは『弐』という漢数字だった。
何故弐なのか気になったハナビはサイゾウに声をかけようとするが、その前に気づいた。
要するに分かれ道なのだ。

「ちょっと待って。ここに来るまでに分かれ道がもう一個あったってこと？」

「ん、あったぞ。気づいていなかったのか？」

気づいてなかった。

ちなみにサイゾウは足元の汚れなどを確認して二人を追跡していたのだ。

「俺が先導する。あんたは周囲を警戒してくれ。そういうの得意だろ？」

「仕方なしよ。好きでやるわけじゃないから」

「いいさ。あんたはあんたの仕事をこなしてくれ。俺が攻略法を考えるから」

さて、とサイゾウは息を吐いて前に進む。

サイゾウが何故ここで的確な処置を取れるのか。それは実に簡単な理由だった。

うちはの蔵書にある文献にここが書かれている資料を読んだことがあるだけの話。

欺きの洞窟。

もとはうちはに伝わる対幻術結界用の訓練の場所だった。

「欺きの洞窟。文献でしか読んだことないからわからないが、随分と苦労しそうだ」

もちろんサイゾウはここに来るのは初めてであり、写輪眼も開眼していないからとても厳しいことに変わりはない。

こうしてサイゾウとハナビは合流し、試験を始めた。

四．名門一人、どつぼに嵌る（後書き）

お待たせしました。ＧＷ遊び呆けてたらこんなに長い間書くのに時間がかかってしまいました。
ごめんなさい＞＜

あとお気に入りが２００件超えたよ！やったねたえちゃん！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0786s/

うちは転生記

2011年6月1日14時05分発行